



平成30年度 (2018)

和歌山県立医科大学 地域医療支援センター
夏季合同研修 報告書

和歌山県
地域医療支援センター
CMSC
COMMUNITY MEDICAL SUPPORT CENTER
www.cmsc.jp/



平成30年度
和歌山県立医科大学
地域医療支援センター

夏季合同研修
報告書



CONTENTS

●ご挨拶.....	2
●実施要項.....	3
●研修スケジュール.....	4
●研修内容.....	7
病院・診療所研修.....	9
県外研修.....	44
保健所研修.....	62



ご挨拶

和歌山県立医科大学地域医療支援センター センター長・教授
和歌山県地域医療支援センター センター長

上野 雅巳

平成23年度から実施している夏季合同研修につきましては、平成25年度から本学医学部地域医療枠学生と和歌山県出身の自治医科大学医学部学生、また、平成27年度からは近畿大学医学部和歌山県地域医療枠学生の研修希望者と共に合同研修という形で行うことができ、ここにご報告できますことを大変嬉しく思います。

ご協力いただきました各病院・診療所、保健所、大学の先生方及びスタッフの方々には厚く御礼申し上げます。

今年度も将来、本学医学部地域医療枠学生と同じ和歌山県の地域医療に携わる自治医科大学医学部学生、近畿大学医学部和歌山県地域枠学生とが、卒業後、勤務する予定の県内各病院・診療所・保健所や県外の大学・病院での研修を通して、地域医療の現状を知って理解を深めてもらうこと、学生たちが様々な手技を体験すること、また他大学・他学年との交流の場を設けることなどを目的として合同研修を実施しました。

本学医学部地域医療枠3,4年生と自治医科大学1~5年生は共に県内公的病院・診療所などで2日間の研修を行い、地域医療の実際の現場に触れることができました。本学医学部地域医療枠5年生は県外研修として、山口県の病院、自治医科大学などで2~3日間の研修を行いました。本学1,2年生は、昨年度から保健所にご協力を頂き、保健所で研修を実施しました。地域における保健所の役割や仕組みを学び、様々な視点から地域医療等について理解を深めることができましたと思います。また、近畿大学医学部和歌山県地域医療枠学生は今年度、和歌山県立医科大学附属病院において、1日間の研修を行いました。

研修中に実施した交流会を通して、学生間だけではなく、本学医学部地域医療枠出身の先生方との交流も深まりました。先輩方から貴重な話を聞くことにより、医師としての将来像が鮮明になったかと思えます。

このような合同研修や交流会を通して、学生たちが互いに刺激し合い、共に高め合い、本県の地域医療を担う立派な医師へと成長してくれることを心より願っています。

私たち地域医療支援センター教職員一同、今後も学生たちが安心して卒業後の勤務に臨めるよう、サポート体制などの環境作りに取り組んで参りたいと思います。

実施項目

●研修の目的

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠学生と和歌山県出身の自治医科大学医学部学生、近畿大学医学部和歌山県地域枠学生が、県内へき地や県外の医療現場で研修・見学を行い、地域医療の魅力や特性を理解し、地域医療に従事する医師の役割及び責任についての認識を深めることを目的とする。

●参加者

- ・和歌山県医科大学医学部地域医療枠学生 36名(1～5年生)
- ・自治医科大学医学部学生 9名(1～5年生)
- ・近畿大学医学部和歌山県地域枠学生 4名(1, 5年生)

●日程

病院・診療所研修

平成30年8月8日(水)～9日(木)、16日(木)～17日(金)、23日(木)～24日(金)

県外研修

平成30年8月8日(水)～10日(金)、19日(日)～21日(火)

平成30年8月23日(木)～24日(金)

保健所研修

平成30年7月24日(火)、26日(木)、31日(火)



研修スケジュール

病院・診療所

地域医療枠 3,4 年生、自治医大生 1～5 年生、近大生 1,5 年生

8月8日(水)	
朝 9:00	(当日出発) 公共交通機関を利用して各研修先へ 【病院研修1日目】 病院で研修 開始 〈研修先病院〉 ◎有田市立病院
8月9日(木)	
午後	【病院研修2日目】 研修終了 病院 出発
8月15日(水)	
午後	(前泊組) 公共交通機関を利用して各宿泊先へ
8月16日(木)	
朝 9:00	(当日出発組) 公共交通機関を利用して各研修先へ 【病院・診療所研修1日目】 各病院・診療所で研修 開始 〈研修先病院・診療所〉 ◎高野山総合診療所 ◎国保野上厚生総合病院 ◎川上・寒川診療所 ◎白浜はまゆう病院 ◎七川診療所 ◎那智勝浦町立温泉病院 ◎国保北山村診療所
8月17日(金)	
午後 19:00～ 20:00	近畿大学医学部和歌山県地域枠学生 〈研修先病院〉 ◎和歌山県立医科大学附属病院 【病院・診療所研修2日目】 研修終了、各病院・診療所 出発 交流会(場所: 福利厚生棟 1階生協食堂) 終了・解散
8月23日(木)	
朝 9:00	(当日出発) 公共交通機関を利用して各研修先へ 【病院研修1日目】 病院で研修 開始 〈研修先病院〉 ◎国保すさみ病院
8月24日(金)	
午後	【病院研修2日目】 研修終了 病院 出発

交流会について

8月17日(金)の夜に、和歌山県立医科大学学生協食堂にて交流会を開催しました。

出席者には地域医療枠学生、和歌山県出身自治医科大学学生だけでなく、現在和歌山県で活躍中の地域医療枠の先生方、近畿大学医学部和歌山県地域枠学生も参加し、交流を深めました。

研修スケジュール

県外研修

地域医療枠 5 年生

8 月 8 日 (水)	
午後	(当日出発) 公共交通機関を利用して研修先へ 【病院研修 1 日目】 病院で研修 開始 〈研修先病院〉 ◎下関市立豊田中央病院
8 月 9 日 (木)	
	【病院研修 2 日目】 公共交通機関を利用して各研修先へ移動 ◎角島診療所 ◎殿居診療所
8 月 10 日 (金)	
午後	【病院研修 3 日目】 研修終了 病院 出発
8 月 19 日 (日)	
	(前泊組) 公共交通機関を利用して研修先へ
8 月 20 日 (月)	
	【病院研修 1 日目】 公共交通機関を利用して各研修先へ移動 ◎角島診療所 ◎下関市立豊田中央病院
8 月 21 日 (火)	
午後	【病院研修 2 日目】 研修終了 病院 出発
8 月 22 日 (水)	
	(前泊組) 公共交通機関を利用して研修先へ
8 月 23 日 (木)	
9:00	【病院研修 1 日目】 病院で研修 開始 〈研修先病院〉 ◎自治医科大学附属病院
8 月 24 日 (金)	
午後	【病院研修 2 日目】 研修終了 大学 出発

研修スケジュール

保健所

地域医療枠 1,2 年生

7月24日(火)	
朝	(当日出発) 公共交通機関を利用して研修先へ
9:00	【保健所研修】 保健所で研修 開始 〈研修先保健所〉 ◎田辺保健所
17:00	研修修了 保健所 出発
7月26日(木)	
朝	(当日出発) 公共交通機関を利用して各研修先へ
9:00	【保健所研修】 保健所で研修 開始 〈研修先保健所〉 ◎岩出保健所 ◎和歌山市保健所 ◎湯浅保健所 ◎御坊保健所
17:00	研修修了 各保健所 出発
7月30日(月)	
	(前泊組) 公共交通機関を利用して研修先へ
7月31日(火)	
9:00	【保健所研修】 保健所で研修 開始 〈研修先保健所〉 ◎新宮保健所
17:00	研修修了 保健所 出発

実習先病院・診療所

< 病院・診療所研修 >

平成 30 年 8 月 8 日 (水) ~ 9 日 (木)、8 月 16 日 (木) ~ 17 日 (金)、8 月 23 日 (木) ~ 8 月 24 日 (金) の間、地域医療枠 3、4 年生と自治医科大学大学生、近畿大学学生が 10 グループに分かれ、各病院・診療所で研修を行いました。

< 交流会について >

平成 30 年 8 月 17 日 (金) の夜は、和歌山県立医科大学大学生協にて交流会を開催しました。

普段は交流する機会は少ないですが食事をしながらいろいろな話を聞くことができ、和歌山県立医科大学、自治医科大学や近畿大学の学生間だけではなく、地域医療枠 OB の先生方とも楽しく交流することが出来ました。

和歌山県立医科大学 地域医療枠 3,4 年生、自治医科大学 1 ~ 5 年生



参加者名簿

●病院・診療所研修

病院・診療所研修 和歌山県立医科大学 地域医療枠

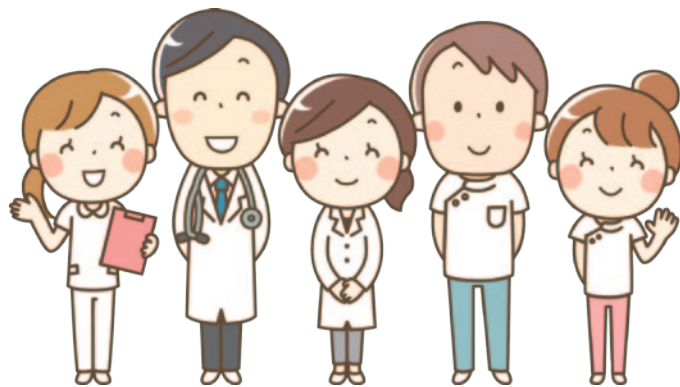
研修先	学年	氏名
国保野上厚生総合病院	4年生	大道 彩夏
	4年生	曲谷 拓季
有田市立病院	4年生	井上 育美
	4年生	塩谷 一樹
川上・寒川診療所	4年生	松尾 薫

研修先	学年	氏名
白浜はまゆう病院	3年生	西平 大輝
国保すさみ病院	4年生	仁木 龍登
	3年生	東 丈
	3年生	出崎 祐気
那智勝浦町立温泉病院	3年生	長沖柊一郎

自治医科大学

研修先	学年	氏名
高野山総合診療所	1年生	上松 大祐
	1年生	武内 廉
川上・寒川診療所	5年生	玉置 佑麻
白浜はまゆう病院	2年生	山崎 博貴

研修先	学年	氏名
七川診療所	5年生	山家 一葉
	2年生	西岡 秀悟
那智勝浦町立温泉病院	4年生	園田 健留
	4年生	玉井 里奈
北山村診療所	4年生	岡本恵里花



1 高野山総合診療所



位置 和歌山県伊都郡高野町高野山 631 番地

夏期体験実習報告
 ~高野山総合診療所での実習を終えて~
 自治医科大学 1年 上松大祐, 武内廉

高野山について

高野山は和歌山県伊都郡高野町にある、周囲を1000m級の山々に囲まれた標高800mの平坦地をさす。(市内と比べて気温が約5.5℃低い)
 弘法大師空海が開いた金剛峯寺をはじめとして、数々の寺院があり宗教色の強い街並みとなっている。
 人口 3096人 (1688世帯)
 10年で1700人ほどのペースで人口が減少しており、歯止めがきかない状態になっている。

高野山総合診療所について

- 元高野町立高野山病院（病床数 43床）
- 現在、病床数は2床（現在は使われていない）
- 診療科目は内科、外科、眼科、小児科



通所リハビリ



基本方針

- ✓ 地域住民の健康増進に寄与 **地域医療**
- ✓ 観光地における救急医療の確立 **観光地医療**

常勤医師

廣内 幸雄 先生（自治医大 1期）
田中 瑛一郎 先生（自治医大 34期）

1. 観光客医療

開創1200年大法会期間中の観光客の疾病
（平成27年4月2日～5月21日 60万人来訪）

実数 89人
30都道府県
外国人 5人（アルゼンチン、スイス、
スロベニア、台湾、フランス）

主な疾病
損傷（外傷、骨折など）
循環器系（脳、心臓）
消化器系



診察室



エコー、内視鏡

英語圏以外の国から来る患者さんもいる

↓
どうやってコミュニケーションをとるか？

↓
スマートフォンの翻訳機能を活用したりして病状を聞く

こういった医療を行うのも観光客が多い高野山診療所特有の取り組み方である

レントゲン室



CT室

廣内先生のように地域で働く医師として、地域住民にとけこむ必要がある

↓
地域の方々と信頼関係を築くことができる

↓
カルテを見て患者さんの病状を把握することだけでなく、カルテの行間と言われるその人の生活背景や性格などを見ることで、より深くまで患者さんの病状や健康状態まで知ることができる

2 国保野上厚生総合病院



位置 和歌山県海草郡紀美野町小畑 198 番地

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 4 年生 大道 彩夏

1. 研修施設とその地域の概要

病院の概要

国保野上厚生総合病院は、和歌山県紀美野町にあり、きのくに線 JR 海南駅から車で 20 分ほどの場所に位置する。病床数は一般病棟 100 床、療養病棟 54 床、精神病棟 100 床で、5 階：医療療養病棟、4 階：地域包括病棟、3 階：一般病棟、2 階、1 階：外来病棟となっており、別に精神科病棟がある。診療圏は和歌山県北西部に位置しており、海南市と紀美野町の 1 町 1 市で構成された一部事務組合によって運営されている。

患者は高齢者が多いため、慢性患者が多く、大学病院よりも長く入院できるようになっている。また、山間部であるため虫さされなどの患者が多く、蜂によるアナフィラキシーショックなど

に対応することもしばしばある。

地域の概要

国保野上厚生総合病院が位置する紀美野町は、北に和歌山市、紀の川市、南には長峰山脈が東西に走り有田郡に、東は伊都郡、高野山にそれぞれ隣接し、西は紀伊水道をはさんで徳島県と向かい合っている。地域全体として病院が少ないため病院までが遠い地域も多く、緑豊かな反面細く曲がりくねった山道も多い。また、高齢化が非常に進んでいる地域である。

2. 研修内容

1日目

午前は、各病棟を見学し、西事務長から一通り病院についての説明を受けた。野上厚生で働いている地域医療卒の先輩にも同行していただき、国吉、長谷毛原診療所にも連れて行っていただいた。道中、地域で働く医師として必要なことなど、様々なお話を伺った。

昼には弁当を食べながら、病院長の柳岡先生、加山先生、永井先生、井上先生の3名の地域医療卒の先輩方とお話した。高齢化が進む地域に必要な診療科、紀美野町の現状、そして先生方の学生時代の話など、様々な話を聞くことができた。

午後は、訪問看護に同行させていただいた。訪問先では、血圧、体温、脈拍を測ったのち、点滴を行っていた。看護師さんは、点滴の間も様々な話をして患者とコミュニケーションをとり、患者の気持ちを優先して看護している様子がよくわかった。病気だけでなく、患者を全人的に看ることの大切さに改めて気づいた。

2日目

午前中、出口先生の外来を見学させていただいた。専門は消化器内科ということだったが、幅広い疾患をかかえた様々な患者が訪れ、その一人ひとりに親身に対応していた。実際、一型糖尿病、C型肝炎、不整脈疑いなどの患者さんが訪れていた。時期的にも、熱中症疑いの患者も多く、水中毒が疑われる患者もいた。精神科病棟があるということもあり、精神科の疾患を患っている患者も多いとお聞きした。

3. 考察

この二日間の研修を通して、まず患者、そしてその家族の方々とのコミュニケーションの大切さに気付かされた。訪問看護にしても、外来にしても、患者との会話の中で患者の状態を把握し、判断する医師や看護師の姿を目の当たりにし、私も将来そのような信頼関係を築き、ささいな変化にも築くことのできる医師になりたいと考えた。

また、様々な疾患を診ている現場を実際に見学し、地域の医師として、専門的な知識と技術をもつだけでなく、幅広く診ることができるようになることが大切だと改めて感じた。この二日間で感じたこれらのことを今後の勉強、研修で生かしていきたい。

4. 謝辞

最後になりましたが、今回私たちのために貴重な時間を割いてくださった、柳岡先生、出口先生、加山先生、永井先生、井上先生、西事務長をはじめとする野上厚生総合病院の皆様、今回研修を企画してくださった地域医療支援センターの皆様に厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠4年生 曲谷 拓季

1. 研修施設とその地域の概要

国保野上厚生総合病院の診療圏は和歌山県北西部に位置し、海南市・紀美野町が中心である。紀の川市、和歌山市、有田郡、伊都郡、高野山に隣接しており、西は紀伊水道をはさんで徳島県と向かい合っている。気候は温暖であり、冬でも降雪はほとんどなく緑豊かな地域である。病床数は一般病棟 100 床（うち地域包括ケア病棟 57 床）、療養病棟 54 床、精神病棟 100 床である。診療科目は内科、外科、整形外科、婦人科、神経精神科、眼科、耳鼻咽喉科、泌尿器科、脳神経外科がある。また、内視鏡センターもある。患者さんは高齢者の方がほとんどで、70 代、80 代の方が多いと伺った。

2. 研修内容

今回の研修では 1 日目は病院の施設案内と国吉診療所、長谷毛原診療所の見学、在宅看護の見学、2 日目は内科の外来見学を行った。

病院の施設案内では、主に 3、4、5 階の病棟の様子を見学した。5 階は療養病棟で慢性期の患者さんが入院されていた。4 階は地域包括ケア病棟で、3 階は内科、外科、整形外科などの急性期の患者さんが入院されていた。また、今回は見学できなかったが、国保野上厚生総合病院では精神科病棟が別館にあり、病床数も 100 床と他病院とは少し異なるところも見られた。

次に病院の周囲の環境を案内していただき、国吉診療所、長谷毛原診療所を見学した。いずれの診療所も山の中にあり、交通の都合で国保野上厚生総合病院に行くのには少し難しい人が診療を受けているのかなと感じた。

1 日目の昼は病院長の柳岡先生、井上先生、加山先生、永井先生と食事をとりながら、お話

しした。先生方の学生生活のお話や、現在のへき地医療などについてお聞きした。なかでも現在、へき地医療では整形外科医と精神科医の医師数が少ないというのは意外だった。しかし、確かに高齢化社会の進んでいる、進んでいくであろう現在ではアルツハイマー型認知症など高齢者によく見られる精神科が絡む疾患が増えていることを考えると、今後精神科医は重要な役職となると考えられる。また、加齢に伴い関節運動の低下などの治療に対して整形外科医も必要となると思う。

午後からは、在宅看護の見学を行った。車で5～10分程度のところにある高齢男性のお宅で、ケアマネジャーの方は健康状態のチェックだけでなく、ご家族の話、普段の過ごし方や、最近の気候や世間話など多くの話題にわたってお話しされていた。また、入浴の介助を行っていた。私も顔そりを少し手伝わせて頂くという貴重な体験をすることができた。普段人の顔そりをしたことがなかったので難しかったが、「顔の皮膚を少し伸ばしながらやるとやりやすいよ」とアドバイスを頂いてなんとかすることができた。在宅看護の見学の中でも印象的だったのが、ケアマネジャーの方と利用者さんの話の中で「医学的な難しい話はわからないけど、しっかり顔を見てお話ししてくれる先生がいい」という言葉や「家族の人にお話しするのもわかるけど、まずは本人に話をしてほしい」という言葉だった。

2日目は内科の外来の見学を行った。途絶えることなく患者さんが来られていて、一見スピーディーな診療でも多くの情報を得ていることがわかった。自己免疫系疾患や高血圧症、循環器疾患、消化器疾患など多岐にわたる疾患を診療している様子を見学することができた。

3. 考察

今回の研修で、国保野上厚生総合病院は地域に根差した医療を行っていると感じた。その地域ならではの話し方で患者さんとコミュニケーションをとっているのが印象的だった。在宅介護の見学では病院ではない利用者の方の住み慣れたところでの生活の介助を見て、そのなかでのコミュニケーションの取り方や医療のかかわり方を考えさせられるきっかけとなった。利用者さんが口にしていたような、患者さんと向き合って二人三脚で今後を考えられるような医者になりたいと思った。

外来見学では、内科と一口に言ってもかなり多くの疾患を扱っていて、幅広く診療する力を身に着けなければいけないということを実際に感じる事が出来た。また、診療の少しの間でも血圧や脈拍、リンパ節の腫脹の有無、心音、腹水の有無、腹部の打診、聴診、脱水の有無、神経障害の有無などかなり多くの情報を得ているとおっしゃっていた。それだけでなく患者さんの様子、性格にあわせて声のかけ方を考えているというお話を聞き、病気だけでなく人を診るとはこういうことだと感じた。4年生では臨床科目を勉強しているがすこしだけでもその知識をもとに理解しながら外来見学という実臨床をみる事ができて貴重な時間を過ごすことが

できた。

この二日間を通して、今までにないたくさんの経験をすることができ、大学病院とはまた違った地域に根付いた医療をみることができた有意義な研修だった。

4. 謝辞

最後になりましたが、二日間お忙しい中研修を受け入れてくださった病院長の柳岡先生をはじめとする国保野上厚生総合病院の皆様、今回の研修を企画してくださった地域医療支援センターの方々に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

3 有田市立病院



位置 和歌山県有田市宮崎町 6

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 4 年生 井上 育美

1. 研修施設とその地域の概要

有田市立病院は、有田市、湯浅町、広川町、有田川町からなる有田保健医療圏に位置する。有田保健医療圏は県の面積の 10% を占め、人口は約 7 万人であり、高齢化率は 31.9% と全国平均の 26.6% に比べ非常に高くなっている。救急医療体制の充実、回復期病床の充実、僻地等を含めた在宅医療の実現を目指している。

本病院には 12 診療科（内科、循環器科、脳神経外科、外科、整形外科、産婦人科、耳鼻咽喉科、泌尿器科、皮膚科、小児科、眼科、麻酔科）が設けられていて、病床は一般 54 床、地域包括ケア 99 床、感染床 4 床の約 160 床で、多いときには 130 ほど埋まることがある。本病院は救急医療の強化、病床機能の転換、訪問看護 ST の強化、産科・小児科の充実に取り組んでおり、

救急告示病院、災害拠点病院、第二種感染症指定病院である。

2. 研修内容

8/8,9の2日間の研修内容は以下の通りである。

1日目

- 9:00 集合
- 9:00-10:00 外来見学
- 10:00-10:30 午後の肝腫瘍生検のレクチャー
- 10:30-11:30 外来見学
- 11:30-12:30 レポート作成等
- 12:30-13:00 薬説
- 13:00-13:30 昼食
- 13:30-14:00 心エコーのレクチャー
- 14:00-16:10 肝生検2例見学
- 16:10-16:40 レポート作成
- 16:40-17:10 結核症例の説明
- 17:10-18:30 レポート作成
- 18:30-21:30 夕食会

2日目

- 9:00-12:30 内視鏡見学と説明
- 12:30-13:00 薬説
- 13:00-14:00 昼休憩
- 14:00-16:00 救急見学、疾患鑑別
- 16:00-16:30 相談

3. 考察

病院は駅から徒歩10分ほどの距離にあり比較的近いが、高齢の方などには少し大変な距離であると感じた。

有田市立病院は二次救急を受け入れているだけでなく、大学病院等での急性期の医療を受けた後の患者さんを受け入れて在宅復帰を応援するクッション病院としての役割もある。在宅医療の必要性が言われているなかで、地域の中核病院として非常に重要な役割の1つであると思った。そのなかで心リハの導入に大きな効果がみられているという話を伺い、その役割を果たす独自の取り組みがなされていることを知った。

今までの地域研修では、疾患についての知識がほとんどない状態だったので、地域の病院の雰囲気や診療の様子を知ることが主になっていましたが、今回の研修はある程度机上で学んだうえで行かせていただいたので、診療の内容についても目を向けることができました。

内科の外来では、複数の疾患を合併してる高齢の方が多かった。初診の患者さんにはオーバーリアージでもいいので想起できる限りのたくさんの疾患をあげて否定する材料を揃えていくことが大切だと教わった。

また救急の現場に立ち会い、問診や身体所見の取り方を教わり、実際に鑑別を考える過程を経験することで、実際に救急の患者さんにどのように対応するかを見て学んだだけでなく、診療現場で役に立つ知識やポイントがどんなものか、今後どういうふうに勉強すべきかやどんな知識が足りていないかを実感することで今後の勉強の方針をつかむことができた。

他にも心エコーや上部消化管内視鏡のレクチャーをしてくださり、非常に内容の濃い充実した2日間を過ごすことができた。

また、先生方は非常にお忙しい様子ではあったが、昼食時や空いた時間には医局に集まってお話しされていたりとなごやかな雰囲気であり、とても魅力的だった。診療を見学させてくださったり、レクチャーや、口頭試問をしてくださったりモチベーションが高まった。

4. 謝辞

今回の研修を受け入れてくださった田中先生をはじめ有田市立病院の方々、このような機会を設けてくださった上野先生、北野先生、山野先生、本当にありがとうございました。将来についてより深く考える非常に有意義な研修をさせていただきました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠4年生 塩谷 一樹

1. 研修施設とその地域の概要

・有田市立病院について

開設日 昭和25年10月25日

標榜科 12診療科（内科・循環器科・脳神経外科・外科・整形外科・産婦人科・耳鼻咽喉科・泌尿器科・皮膚科・小児科・眼科・麻酔科）

病床数 一般54床 地域包括ケア99床 感染症4床

指定 救急告示病院・災害拠点病院・第二種感染症指定病院

職員 医師25名 看護師100名 その他54名（計179名）

・医療圏について

有田保健医療圏は、有田市、湯浅町、広川町、有田川町で構成されており、面積は474.86㎡、人口は74,255人である。人口増減率は-5.6%と減少しており、全国(-0.75%)と比較すると大きく減少していることが伺われる。さらに、高齢化率は31.9%となっており、こちらも全国(26.6%)と比較すると、かなり高齢化が進んでいることが分かる。

有田保健医療圏の課題としては、周産期・小児医療を含む救急医療体制の充実や、回復期病床の充実、僻地等を含めた在宅医療の充実が挙げられている。

それを踏まえて、有田市立病院では、救急医療の強化(H28 / 579件→H29 / 933件)、病床機能の転換(H29に一般病床45床を地域包括ケアに転換)、訪問看護STの強化(H30にサテライト事務所の設置)、産科・小児科の充実(H29に分娩再開、H30に小児科常勤医師招聘)を行った。

2. 研修内容

8月8日(水)

8時40分に病院に到着し、9時から研修を開始した。まずは10時まで外来見学をした。高齢の方が多いただろうと予想していたが、年齢層は若い人で19歳など幅広く、主訴も多様であった。中年～高齢の方では、熱中症や脱水などの注意が呼びかけられていた。患者のQOLを考慮して、食べたいものがあれば、なるべく食べられるような工夫を提案し、仕事の都合などでなかなか来院できない人には薬をできるだけ多くオーダーするといったように、地域住民に寄り添った医療体制が見受けられた。また、診察の合間に、患者の説明や処方薬の副作用、検査結果からの考えられることなどを質問形式で解説していただいた。

10時から30分程度、医局で午後の肝生検の見学に向けて症例についての説明をしていただいた。その後は10時半～11時半までの1時間ほど、外来見学をした後、13時の薬説までの間、午後からの肝生検に向けて各自で肝臓がん等の復習をした。薬説後、医局で弁当をいただいた。昼食で先生方とお話をしていた時に、エコー画像を読むのが苦手だと話したところ、昼食後13時半から30分程度、実際に心エコーを用いて画像の読み方などを教えていただいた。

そして、14時～16時まで肝生検を2例見学した。午前中に肝生検や肝臓がんについて勉強したことに加え、直前にエコーを教えていただいていたので非常に有意義な見学になった。見学後、少し休憩をいただき、16時半ごろから医局にて、肺結核の症例の画像診断や鑑別疾患について、質問形式で解説していただいた。その後、17時半頃～18時過ぎまでは待機室で、解説していただいたことの復習やレポート作成を行った。

8月9日（木）

9時前に病院に到着し、9時から12時半まで上部内視鏡検査5例を見学した。見学中に、手技の説明や見るべきポイントなどを解説していただいた。その後、たまたま2日連続薬説があるとのことで、この日も13時から薬説に参加させていただいた。

2時ごろ、すぐに救急外来まで来るようPHSに連絡が入った。駆けつけると、担当医に、若い方が下腹部痛で救急搬送ということ、救急隊の方の所見（バイタルや圧痛・反跳痛の情報）、そして現病歴の聴取の項目だけを教えていただいた後、自分たちで現病歴等の聴取を行い、カルテを書くようにと告げられた。もちろん触診などは担当医の指導の下で行った。その後、CT、X線等の検査をしている間に、考えられる疾患を可能な限り挙げるように言われ、次にその画像をもとに①最も可能性の高い疾患②①に対抗する疾患③見逃してはならない疾患をあげるように言われた。結果から言えば、きちんと診断できていたのだが、本当にこの診断でいいのかと1時間～1時間半以上は悩んでいたため、その間に患者の処置も家族への説明も終わってしまった。その後、医局にて自分たちの診断理由などを担当医に説明した後、担当医に解説・総括をしていただいた。

3. 考察

有田市立病院は、自分の思い描いていた地域中核病院における地域医療を行っていたように感じた。地域連携・医療連携と一言で語っても、それを実現するにはいくつもの課題があり、非常に難しいものだと思う。地域・医療連携と言えば、医療・保険・介護・福祉の連携が地域で確保される体制を思い浮かべるとは思うが、それらを実現するにはシステムの確立だけでなく、実際の人と人との関係や関わり方が非常に重要になってくると思う。そういう点で有田市立病院は、地域の開業医や保険・介護などとの連携はもちろんのこと、患者との距離感が良い意味でとても近く、「患者に寄り添った医療」を展開できていると感じた。では具体的にどのような点で連携がとれているのか少し掘り下げて考えた。医療などの連携であるが、有田市立病院の徒歩圏内には開業医病院が多数あり、高速を使えば30分程度で医大がある。そのため、医大へ運ばれた重症患者の転院先として一度有田市立病院に患者を送ってもらい、その後自宅療養が可能になれば多数ある開業医病院の中から患者に合ったところを紹介するという形をとることができ、逆に有田市立病院では治療できない患者を一度医大に送り、その後の転院先として受け入れる、といったような「クッション病院」としての役割を果たしている。この機能を支えているのがH28の救急医療の強化や、H29の病床機能の転換（一般病床45床を地域包括ケアに転換）である。また、訪問看護STの強化（H30）や普段なかなか来院できない方のための出張外来などもこうした地域の包括的な医療体制の一助となっている。これらのシステムに加え（もしかするとこれらのシステムが土台として確立されているからこそかもしれ

ないが)、有田市立病院では患者一人ひとりの要望に応えられるような医療を展開できているように感じた。ここで大事なのは、患者の要望に応えることと、患者が自分の要望を言いやすい関係性・環境であることだと思う。現在、2025年問題をはじめとした高齢化社会の多くの問題に対して、様々な医療体制の変化が試みられており、おそらく近い将来、地域包括的なシステムは多くの地域で確立されていくと推測される。そうしたときに、そのシステムを患者が最大限に利用できるようにするために、患者と医療従事者との関係性が重要になってくると思う。

4. 謝辞

今回の研修では、有田市立病院の多くのスタッフの皆様に温かく手厚いご指導とサポートをしていただきました。ここで学んだ多くのことから、私の目指す医師像をより明確化することができました。これからも多くの人に支えられ、また、支えていけるように頑張っていきます。本当にありがとうございました。

4 川上診療所



位置 和歌山県日高郡日高川町
川原河 264

5 寒川診療所



位置 和歌山県日高郡日高川町
寒川 293 番地



寒川診療所

- ▶ 1958年に僻地診療所が設立
- ▶ 平成27年度までは自治医大卒業生が2年交代で勤務。平成28年からは新谷先生が勤務
- ▶ 医師 1名(新谷先生 鹿児島大学卒)
看護師 1名
事務 2名

日高川町について

- ▶ 2005年(平成17年)5月1日に、川辺町・中津村・美山村が合併
- ▶ 中央に流れる日高川が名前の由来
- ▶ 旧中津村、美山村では林業が中心で、紀州備長炭の生産量は日本一

ポリファーマシーの問題点と対応

- ▶ 多剤併用による有害事象の出現、アドヒアランスの低下
- ▶ 多剤併用の有害事象には転倒の発生率、死亡率上昇、また認知機能の低下 etc
- ▶ 対応としては1疾患に対しなるべく少ない薬剤の使用、薬物療法以外の手段の考慮
- ▶ メディカルスタッフや家族とのコミュニケーション

川上診療所

- ▶ 2000年、日高川町保健福祉センター内に設立
- ▶ 保健センター内には民間企業のデイサービスも併設
- ▶ 医師 1名(平林先生 16期生)
看護師 1名
事務 2名

謝辞

平林先生、新谷先生をはじめ看護師さん、事務員さん、また今回の夏期研修をサポートして頂いたすべての皆様
に深く感謝いたします。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠4年生 松尾 薫

1. 研修施設とその地域の概要

川上・寒川両診療所が位置する日高川町は和歌山県のほぼ中央部に位置しており、地区のほとんどが山間部であり、寒川地区では65歳以上の人口率が56%の超高齢化地区となっている。

川上診療所では、職員は医師1名、看護師1名、事務2名の計4名である。寒川診療所とは異なり、和歌山県へき地保健医療計画ではへき地診療所としては指定されていない。ITを利用した医療連携を行っており、日高川町美山地区の保養医療にはかかせない存在である。訪問診療は、寝たきり状態や交通機関の利用が困難な患者、高齢者の一人暮らしなどの患者に対し、月1回などの頻度で行っている。

寒川診療所では、職員は医師1名、看護師1名、事務1名の計3名である。出張診療を行っており、上初湯川診療所には週2回、猪谷出張所には週1回出張診療所を開設している。その他にも訪問診療も行っている。

両診療所ともに病床はなく、設備としてはX線やエコー、心電図の機材は両診療所に置かれており、平林先生が消化器専門ということで、川上診療所には胃カメラや大腸カメラも置かれている。診療科は川上が外科・内科・小児科で、寒川が内科と小児科である。高血圧や糖尿病、腰痛症などの関節痛といった慢性疾患を抱える高齢者が受診患者の大半を占めている。

2. 研修内容

●研修日程

1日目(8月16日):川上診療所

8:45~12:00 外来見学

12:00~13:00 昼食

13:00~15:30 往診見学

16:00~17:00 採血手技及びエコー手技練習

2日目(8月17日):寒川診療所

9:00~12:00 外来見学

12:00~13:00 昼食

13:00~16:00 往診・出張診療所見学

1日目は、川上診療所で研修を行った。午前中は平林先生の外来診察を見学した。慢性疾患に対する診察だけではなく、急性疾患の鑑別や2次医療機関への適切な紹介なども見学するこ

とができた。また、血圧測定や心音聴取を行った。その他にも、3年ほど前から県内の病院で患者情報を共有する「青洲リンク」や遠隔外来用のカメラの導入の説明を受けた。午後は訪問診療を見学した。様々な理由で自力では病院に来られない方の家を訪問して診察を行った。一つの診療所の担当する地区の範囲が広いため、往診の難しさや重要性を感じることができた。往診の後には、平林先生と一緒にエコーの見方や採血の仕方を教わった。私自身、実際に人を相手にして手技を行ったことがなかったので、とても勉強になった。

2日目は、寒川診療所で研修を行った。この日も血圧測定や心音聴取、足のむくみ等を検査した。患者さんの健康診断などの結果から、納得して安心してもらえるような診察をされていた。また、午後の往診と出張診療所の見学を行った。出張診療所では、年々患者数は減少傾向のようだが、その地域の住民にとっては必要なものだと感じた。

3. 考察

今回の研修では、医療手技の経験が少ない私にとって、とても有意義なものになった。実際の地域の病院では、慢性疾患を主としながらも、急性の症状を訴える患者さんに対し、適切な対応を求められることをより深く理解することができた。へき地診療の中で、患者さんとの距離や、コミュニケーション力、またコメディカルとのつながりも大切なものだと感じた。

4. 謝辞

最後になりましたが、お忙しい中今回の研修を受け入れてくださった川上診療所の平林先生と寒川診療所の新谷先生をはじめとするスタッフの皆様、学生による診療を快く受け入れてくださった地域の皆様、研修を企画してくださった地域医療支援センターの皆様に感謝いたします。本当にありがとうございました。

6 白浜はまゆう病院



位置 和歌山県西牟婁郡白浜町 1447 番地



白浜はまゆう病院

1993年に財団法人白浜医療福祉財団が設立した後、1994年に第三セクターとして白浜はまゆう病院が開院。訪問看護ステーション「たんぽぽ」や人間ドック・検診センター、通所リハビリテーションセンター、白浜町中央保健センター等、検査や治療だけでなく総合的なサービスが行われている。

感想

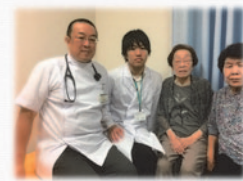
今回の実習をする前までの白浜という町の印象は、海や海の幸、温泉、花火大会といった華やかな印象であったが、山が多くありそれ故緑地も大きく、地域医療という視点で見ると、大きな問題を抱えているのだと実感した。しかし、その一方で様々な医療関係者が関わっており、工夫することによってこの大きな問題に立ち向かうことができてきているのだと分かった。

鮎川診療所

診療科は内科、泌尿器科で一般診療の他に各種検診や訪問診療、また防災にも行っている。レントゲン室やリハビリ装置、エコー等の医療設備も整っている。現在は松中先生が所長をしている。

最後に・・・

今回の実習に携わっていただいた白浜はまゆう病院の関係者の皆様、鮎川診療所の松中先生、診察見学に協力してくださった患者のみなさんに感謝の気持ちを申し上げます。



和歌山県立医科大学医学部地域医療枠3年生 西平 大輝

1. 研修施設とその地域の概要

白浜はまゆう病院は西牟婁郡白浜町に存在する。1994年2月に設立され、病床数は258床で一般病棟82床、地域包括ケア病棟28床、医療療養病棟50床、介護療養病棟50床、回復期リハビリ病棟48床からなっている。診療科は内科・外科・整形外科・小児科・皮膚科・眼科・耳鼻咽喉科・神経内科・呼吸器科・循環器科・消化器科・リウマチ科・リハビリテーション科・婦人科・泌尿器科・麻酔科・心療内科・脳神経外科・アレルギー科・乳腺外科がある。また関連施設として西富田クリニック・鮎川診療所・日置診療所・三舞診療所・川添診療所・訪問看護ステーションたんぽぽ・通所リハビリテーションセンター・骨リウマチ疾患探索研究所があり、そこでは電子カルテによって情報がどこにいても確認できるよう共有されている。また、病院や診療所へのアクセスが困難な患者のためにバスや車による送り迎えが実施されており、移動

手段が少ない高齢者への支援も積極的におこなわれている。

白浜町は和歌山県の南部に位置し、大きくは紀伊水道に面した半島地域、富田川下流域及び日置川流域に存在する。人口は21,949人(H29年5月末現在)、面積は200.98平方キロメートルで県全体の約4.3%を占める。また、白浜の主な観光地はアドベンチャーワールド、白浜エネルギーランド、三段壁、白良浜、千畳敷、とれとれ市場などがある。

2. 研修内容

1日目：

午前中はオリエンテーションのあと、西富田クリニック・鮎川診療所・日置診療所・三舞診療所・川添診療所を訪問、見学した。各クリニック、診療所はどれも離れていて、特に川添診療所ははまゆう病院から車で40分もかかる山の中にあって驚いた。午後は訪問看護ステーションたんぼぼにて訪問看護に同行した。訪問看護の看護師は、患者の現状や症状、病態だけでなく、患者の趣味や家族構成、その家族構成を含めた背景なども把握しており、地域医療特有の患者と密接な医療をしているように感じた。訪問看護の内容としてはリハビリに同行して体調を確認し、また薬の管理、日常の運動の程度を把握する、歩行訓練を促すといったものだった。

2日目：

午前中は川添診療所にて外来見学を、午後は布袋課長とお話をした。午前の川添診療所では、その日の患者数が多くなかったため、前もって患者の病歴などを教えていただき、その後診察を見学させてもらった。また空いた時間に先生から川添の雰囲気や特徴、診療所医療の存在意義やそこに必要な心構えなど教えてもらった。例えば、地域性の病気として林業にかかわる方がチェーンソーの振動によるリウマチを持っているなどである。また電子カルテの普及によって現地にいなくても担当の患者情報が見られて、検査結果などをあらかじめ見ることができ、対応を考えておくことで、その病院に到着してからスムーズな対応ができる、とメリットが大きいとおっしゃっていた。午後のお話で、はまゆう病院の特徴、関連施設との連携方法や診療日の推移といった経歴などを説明していただいた。また、もともと温泉病院であったために、温泉治療の復活を求める声もあることもお聞きした。

3. 考察

この2日間の研修を通して、地域医療の本質を見ることができたように思った。この研修を通して地域医療について改めて深く考えさせられたように思う。1日目の訪問看護ではきちんと利用者の病歴、薬の利用歴を把握しておく必要があり、その薬もできるだけ飲み忘れのないように個包装にするなど、密な連絡、医師の柔軟な処方法、両者の連携が必要不可欠だと感じた。

2日目の診療所では主に糖尿病患者の方と大病院での手術の予後経過観察などが主な診療内容だった。診療所では自分の専門外でも正確な初期診療を行う必要があり、なかでも、致命的な疾患や後遺症が残るような疾患は後の患者の人生を大きく左右することになるため十分な知識をもって診察できるようにならないといけないと強く思った。血液検査など簡単な検査に関しては診療所で看護師にとってもらって、それを病院などに送るという分担が行われていた。きちんと分担しておくことが限られた時間で多くの患者を診ることができる秘訣なのかもしれない。またその地域の立地や交通アクセス、診療所の立地条件や患者数減少による診療日の減少、診察内容などから将来特にどういった知識が自分に必要となってくるのか、書籍などを読んでわかっているつもりだったが、改めてその地域の方とのコミュニケーションがいかに大事かどうか身をもって感じた。医療面以外では、交通手段の問題が顕著に感じられた。紀南地方の特に山間部では高齢化や過疎化が深刻であり交通アクセスも非常に悪く、訪問看護の必要性、またシャトルバスなどの公共交通機関の運用が重要であると感じた。2日間の研修を通して、医学の知識はもちろんのこと柔軟な思考力も必要であることを実感した。

4. 謝辞

最後になりましたが、白浜はまゆう病院の谷口院長をはじめ先生方、榎本次長はじめ事務の皆様、訪問看護ステーションひまわりの皆様、川井先生をはじめ川添診療所の皆様、そしてこの研修を企画して頂いた山野先生をはじめ地域医療支援センターの皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。この普段の大学生活、通常のカリキュラムでは学ぶことのできない貴重な経験を将来地域医療に携わるにあたっての糧として頑張っていきます。本当にありがとうございました。

7 国保すさみ病院



位置 和歌山県西牟婁郡すさみ町周参見 2380 番地

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠4年生 仁木 龍登

1. 地域の概要

すさみ町は、紀伊半島の南南西部に位置し、白浜町、古座川町、串本町と隣接しており、太平洋に面している。東西 19.25km、南北 15.5km、面積は 174.45km² となっており、町土の約 93%は林野で占められ、平地は少ない。気候は温暖で、年平均気温は約 17℃、年間降水量は約 2,300mm である。農林漁業と観光を主要産業としている。

温暖多雨である気候は蔬菜園芸に適し、戦前からレタス栽培が行われている。また、海岸段丘を中心にストック、カスミソウ等の花卉栽培も盛んである。漁業は黒潮本流に近い地の利により、カツオ、ヨコワ、ブリ等が水揚げされている。海岸線一帯は磯釣り・船釣り場として有名である。

2. 病院の概要

国保すさみ病院は、昭和48年7月1日に開設し、診療科は内科、外科、リハビリテーション科の3つである。病床数は72床で、それぞれ一般48床、医療療養型6床、介護療養型18床で、一次・二次救急に対応しており、付随事業として訪問看護を行なっている。H29時点で、年延べ入院患者数は12,951人/年、1日平均入院患者数は35.5人/日となっている。また、年延べ外来患者数は20,019人/年、1日平均外来患者数は82.4人/日、病院職員数は、H30.3.31時点で医師5名、看護師28名、准看護師5名、薬剤師1名、理学療法士2名、その他コメディカル21名の、計62名である。

また、訪問看護師が3名おり、総計65名により運営されている。

3. 内容

研修1日目は、外来や胃カメラを見学した。外来では、救急で一名患者が運ばれてきたので、その人についていろいろ説明を受けた。また、胃カメラでは実際に操作方法を教えてもらい、少し操作することができた。非常に貴重な体験だった。また、この病院では、人手不足を補うために、外科の先生も内科の先生も関係なくカメラを使うとのことで、科に関係なくいろいろな仕事をこなさなければならないのは、大変だと思う反面、すごいことだと思った。

午後からは、本来なら診療所の見学を行う予定だったが、台風が来ている影響もあり、中止となってしまった。

2日目は、午前には訪問看護に同行した。病院の外来とは違い、より患者と近くで接し、違う景色からの医療を見ることができた。ご家族の方がお茶菓子を用意してくれたり、笑顔を見せてくれたりなど、自宅だからこその暖かい雰囲気を感じることができた。

午後からは、院長先生からこの地域の特色や、病院の特徴について講義をしていただいた。すさみのことをたくさん知ることができた。

4. 考察

今回の研修を通して、わたしはより地域と医療との繋がりというのを感じた。というのも、今回は台風という不確定な要素を抱えていたが、それによって人との繋がりをより意識できた。役場の人と病院の人との繋がり、また、地域の人々と病院の人達との繋がりである。特にそれを感じたのは、やはり2日目の訪問看護の時だった。お互いにまず台風の話をして、お互いの安否を確認し、安堵する。そんな関係が自然と出来上がっていたのです。わたしの担当になってくれた看護師の方は、ここら辺の人達はみんな家族のような存在であると教えてくれた。この地域はたしかに不便なのかもしれないが、それ以上に居心地が良く、暖かみに溢れていた。

5. 謝辞

最後になりますが、今回の研修を通して、院長先生をはじめとした病院関係者の皆様、事務

長さん、また協力していただいた皆様、本当にお世話になりました。今後はこの経験を生かし、立派な医師となれるよう日々努力していこうと思います。本当にありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠3年生 東 丈

1. 病院の概要

病院の病床数は 72 床

診療科は外科、内科、リハビリテーション科

救急指定 一次・二次救急対応

看護基準 一般病棟 10 対 1 療養病棟 25 対 1

付随事業 訪問看護

・地域の概要

すさみ町の人口と世帯数（平成 30 年 7 月末日現在）総人口 4,096 人 世帯数 2,180 戸
面積は 174.45km²、町土の約 93%は林野で占められ、平地はわずかである。

2. 研修内容

初日は外来や救急、リハビリ施設を見学した。外来では、内科と外科に分かれていたが、内科でも外科的治療を行い、また外科でも内科的治療を行っているということだった。私は主に胃カメラをみせていただいたが、胃カメラを行っている先生は専門が外科であった。また、研修中、救急車で一人暮らしのお年寄りの患者が運ばれて来られたが、様子を見に行かれた家族の方が連絡されたということだった。地域柄このようなパターンが多いという話を伺った。幸い救急性がなく、私はその後も再び、胃カメラをみせていただき、少し手に取らせてもらった。カメラを操るのは難しく経験の必要性を感じた。その後、リハビリ施設を見せていただいた。

午後からはすさみ町の診療所を巡り、施設内とどういった場所にあるのかを見せていただいた。施設内の設備は簡易的な治療をするには十分な設備が揃っており、想像よりはしっかりしているというのが率直な感想であった。場所はすさみ病院からどの診療所も車で 30 分くらいの山間部にあった。この日は台風がちょうど直撃しており、災害時のことを考えさせられ、この日の研修は終了した。

二日目は午前中に訪問看護に同行した。私は二人の利用者さんのお宅へ同行し、どのようなことをされているのか見学した。一人目のお宅の利用者の方は循環不全で浮腫があり、患部への薬の塗布の手伝いや、自分で入浴することが難しいということで入浴介助を行っていた。また、循環不全のための飲み薬が多く、どれを飲めばよいか難解なため、その薬を分類して、飲み忘

れのないようにされていた。二人目のお宅の利用者の方は、100歳以上の長寿の方で娘さんが介護をされていた。そこでは摘便を、利用者さんの体勢を補助する位置から見学し、初めて見たということもあり印象深いものとなった。

午後からは院長先生のすさみ病院とその地域の医療や環境の現状についての講義を聞かせていただいた。院長先生の講義で印象に残っているのは、以前はコンビニ受診が多かったが、すさみの地域にコンビニ受診を控えるように促すと年々減ってきているというデータが出ているということだった。すさみのような地域の病院では、患者を治すだけでなく、その周りの環境も変えていくことが大切だとおっしゃっていて、このような啓発活動の話をしてくださった。また、いろいろな試みとして日本で二番目にドクターカーをつくり、救急要請に応じて、その場所にドクターを派遣しているということも聞かせていただいた。医師が直接、病院に行くことのできないお年寄りの患者さんのお宅に赴くなど環境にあわせた対応をしていることも知った。

3. 考察

すさみ病院で研修させていただいて、人手が足りず苦勞しているが、予算の問題で人員が増やせないといった状況の中、一人一人に適切な医療を施し、過剰医療を控えることや、地域に溶け込み、コンビニ受診を減らすように促すことは、患者と医師相互のメリットのために重要であると考えている。

4. 謝辞

最後になりましたが、今回の研修を行うに際し、事務長さんや院長先生、外来を見学させていただいた先生方、訪問看護に連れて行ってくださった看護師の方、台風により電車がとまり、田辺駅まで送迎してくださった事務の方、ありがとうございました。

地域医療の実態や雰囲気や以前よりいっそう理解でき、卒後地域医療に携わる上での糧となると思います。本当にありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠3年生 出崎 祐気

1. 研修施設とその地域の概要

病院の概要：

名 称	国保すさみ病院
所 在 地	和歌山県西牟婁郡すさみ町周参見 2380 番地
開 設 日	昭和 48 年 7 月 1 日
開 設 者	すさみ町長 岩田勉
病 院 長	高垣有作
診 療 科	内科、外科、リハビリテーション科
病 床 数	72 床（一般 48 床、医療療養型 6 床、介護療養型 18 床）
救急指定	一次、二次救急対応
看護基準	一般病棟 10 対 1 療養病棟 25 対 1
外来診療	月曜日～金曜日 8：30～17：15（受付は 8：30～11：30）
休 業 日	土曜日、日曜日、祝日、12 月 29 日～1 月 3 日
施設規模	鉄筋コンクリート造 3 階建 延べ床面積 1,717.42㎡
付随事業	訪問看護（すさみ町訪問看護ステーション）

地域の概要：

すさみ町は、紀伊半島の南西部に位置し、紀伊山地を背に、白浜町、古座川町、串本町と隣接し、雄大な太平洋に面している。町土の約 93%は林野で占められ、平地は少ない。

気候は温暖で、年平均気温は約 17℃、年間降水量は約 23,000mm。

- ・総人口 4,084 人
- ・世帯数 2,172 戸（平成 30 年 8 月末日現在）
- ・人口増減率（2010～2015 年）-12.75% （全国平均） -0.75%
- ・高齢化率（65 歳以上・2015 年）46.80% （全国平均） 26.60%
- ・人口密度（2015 年）23.70 人／km² （全国平均） 340.80 人／km²

2. 研修内容

1 日目午前

外来見学

リハビリテーション科見学

1 日目午後
診療所見学

2 日目午前
訪問看護見学

2 日目午後
講義

3. 考察

すさみ町は町土の約 93%は林野で占められ、平地は少ない。国保すさみ病院は海に近い場所にあるので、山間部に住む住民の方々は、国保すさみ病院に通院することが難しい。また、すさみ町は高齢化率も 46.80%と高いため、特に通院が難しい高齢者も多い。そのため山間部に設置されている診療所や、定期的な訪問看護の実施は、すさみ町の地域住民の医療のニーズを満たしているように感じた。

4. 謝辞

病院を見学させていただいた時期が、台風の接近している時期と重なってしまって、当初予定していただいていたものを大幅に変更しなければならなくなったと思いますが、国保すさみ病院の皆様は、私たちの研修がより有意義なものになるように、考えを巡らせてくださいました。スタッフの皆様のおかげで、大変貴重な経験をさせていただくことができました。この度は、貴重なお時間をいただき、誠にありがとうございました。

8 七川診療所



位置 和歌山県東牟婁郡古座川町下露 376



古座川町



- ▶ 人口 約2700人
- ▶ 面積 294km² 県で四番目!!!
- ▶ 高齢化率 52.3% 県で一番

- ▶ 病院 0カ所
 - ▶ 診療所 5カ所
- 入院は串本などの町外へ



七川診療所

- ▶ 医師1名、事務1名、看護師3名
- ▶ 外来：一日平均15名
- ▶ 平井、佐田、下露、西川、添野川の5地区
- ▶ 各地域へ福祉号で迎えに行く
- ▶ 各地域に往診する
- ▶ 毎週水曜日は三尾川へき地診療所へ
- ▶ 毎週木曜日は整形外科



往診・外来

- ▶ 薬を予め用意しておく
診察の後、足したり減らしたり調節
- ▶ なるべく診療所にある薬を処方したい
→ 院外処方だと串本まで行かなければならない
- ▶ くしもと町立病院と連携
→ CTやMRIなどの検査だけを受けに行ける
- ▶ エピペンの処方を増やしている
→ ハチと関わる人が多い



実習の予定

- ▶ 1日目
古座川町保健福祉センター
よりみち喫茶
三尾川診療所
古座消防署七川分駐所
往診（平井地区）
- ▶ 2日目
外来見学



まとめ

地域医療で大事なものは、その地域を知ること



今回の実習で、古座川の地域について学んだ
また、たくさんの方とお話させていただいた



では実際に、診療などにどのように役立つのか

保健福祉センター（古座川町）

- ▶ 食生活改善推進事業
広すぎるので、各地域に出向いたり、リーダーに集まってもらって、アドバイスしたり
- ▶ 介護予防地域支援事業
筋力トレーニング教室、介護予防教室、地区巡回啓発相談事業（よりみち喫茶）



まとめ

地域医療において大事なものは、

その土地、その地域の人、そこでの生活
を知ること

多様な職種の方と話をすること

保健福祉センター

- ▶ 見守り事業
主に65歳以上の要援護者（独居高齢者、高齢者夫婦世帯）や障害者住宅世帯で、介護認定を受けていない方を対象に、見守り員が戸別訪問
- ▶ 認知症・神経難病事業
七川診療所（2ヶ月に1回）、明神診療所（半年に1回）へ神経内科医による診療応援

謝辞

今回の実習においてお世話になった、向井先生をはじめとした診療所の皆様、ご協力いただいた地域の皆様に感謝いたします。

9 那智勝浦町立温泉病院



位置 和歌山県東牟婁郡那智勝浦町大字天満 483 番地 1

那智勝浦町立温泉病院



実習日 平成30年8月16日、17日
44期 園田 健留
44期 玉井 里奈

那智勝浦町立温泉病院について

～新病院 平成30年4月1日 開院～

所在地 那智勝浦町大字天満1185番地4

院長 山本康久

診療科目 内科、循環器内科、糖尿病内科、整形外科、
リハビリテーション科、小児科、眼科

病床 一般病床120床



〈実習スケジュール〉

1日目（8月16日）

午後 救急外来の見学、診察
（胃管の挿入など）
内視鏡の見学
入院患者さんへの診察
内科病棟カンファレンス
病院内見学

2日目（8月17日）

午前 緊急入院患者さんの経過
見学（胃管の抜去など）
病院内見学
午後 山本院長のお話
重症心身障害児者通所施設
「かのん」へ訪問
消防署へ訪問



救急外来では、

園田一肺炎患者を担当
玉井一イレウス疑いの患者を担当

〈今回の実習を通して感じたこと〉

- ・認知症の患者さんなど、意思表示がうまくできない患者さんが多く、身体所見、検査所見を正確に評価できる力が必要。
- ・患者さんの多くは高齢者で、特に排便コントロールがうまくいかず、便秘の人が多かった。
- ・検査結果や画像所見をみて鑑別疾患をあげるのも重要だが、バイタル・意識状態から今患者さんが危険な状態にあるかどうかをまず判断すべきだと思った。

新病院の特色

- ①MRIやCT等の最新医療機器を完備し、新宮市立医療センター・串本町立病院等と協力し、地域医療・救急医療を担う。
- ②400㎡のリハビリテーションセンターと屋外訓練場を設置し、リハビリテーション医療の充実をはかる。
- ③介護予防や認知症予防に有用な温泉を院内で活用すると共に、足湯「悠久の湯」として開放する。
- ④和歌山県立医科大学「リハビリテーション・スポーツ・温泉医学研究所」を院内に開設している。
- ⑤和歌山県福祉事業団「重症心身障害児者通所施設 かのん」を敷地内に開設している。

～謝辞～

夏期研修を進めるにあたり、ご指導いただいた山本院長先生、佐藤先生、鐵尾先生、那智勝浦町立温泉病院のみなさまに感謝いたします。

和歌山県立医科大学医学部地域医療専攻3年生 長沖 柊一郎

1. 研修施設とその地域の概要

今回、私が研修した那智勝浦町立温泉病院は、2018年の4月1日に新病院として開設されたばかりだった。移転理由は、旧町立温泉病院が開院後50年余りが経過し建物が老朽化したことと、地震、津波への対応のためだということだ。「南海トラフの巨大地震」で想定されている最大規模の津波でも浸水しない海拔9.6mの高台にあり、また、大地震後にも十分な機能確保が図られる耐震性能、非常用発電装置や緊急遮断弁付き受水槽等、災害医療の提供に特化した設備を整えられている。また、MRI装置、CT装置等の医療機器も病院の移転と共に最新のものに更新されており、24時間、365日対応の救護室、室内の清浄度クラス10,000の手術室を備えている。さらに、地域包括ケアシステムの医療分野での中核的役割を担うため、地域医療連携室を総合受付の横に配置するとともに、地域医療研究センターの機能を強化するなど、

地域の医療機関と密接に連携した医療を提供されている。

那智勝浦町立温泉病院では、リハビリテーション医療が充実しており、400㎡のリハビリテーションセンターに加え、屋外訓練場、病棟ベッドサイド等での訓練が行われている。リハビリテーションセンターには、日本で初導入となるオランダ製のVRトレッドミルや、運動解析装置等を設置し、最先端の技術を用いたリハビリテーションの提供を可能にしている。

主な診療科は、内科、循環器内科、糖尿病内科、整形外科、リハビリテーション科、眼科、小児科があり、病床は120床ある。観光地という地域の性質上、高齢化が進む地域住民のためだけでなく、観光客の急病などにも対応出来る必要があり、総合診療的医療を中心に、介護予防や、認知症予防にも力をいれている。

2. 研修内容

2日間とも、主に病院の各診療科を案内していただき、設備の説明をしていただいた。また、1日目には救急外来で腹痛を訴えて来院された急病患者さんの診察などを見学し、実際に聴診器で腹部の音を聞いた。また、那智の滝などにも連れて行っていただき、那智勝浦町の案内などもして下さった。2日目の午前中には、回診に同行し、研修医の先生の指導のもと、実際に所見をとらせていただいたり、その所見をパソコンに打ち込む作業などもさせていただいた。また、カンファレンスにも出席し、医師と看護師、ソーシャルワーカーの方たちがどのように話し合い、チーム医療を行っていくのかという様子を見学した。午後からは、病院長の山本先生が私達のために時間を割いて下さり、病院の敷地内にある足湯に実際に浸らせていただいたり、同敷地内にある「重症心身障害児者通所施設 かのん」の見学や、消防署の訓練の見学などもさせていただいた。

3. 考察

今回の研修では、大学のカリキュラム内で行われている病院見学とは異なり、病院内の見学だけでなく、臨床的な体験もできた。まだ3回生の私には、所見のとり方、診察の際の患者さんへの声のかけ方、カルテの打ち込み方など、分からないことやしたことのないことが多かったが、担当の先生方が親切に教えて下さったおかげで、見よう見まねではありながらも、なんとかすることが出来た。

また、今回は自治医科大学の4回生の方達との合同研修だったが、私と学年が近いという事もあってたくさんお話しさせていただき、とても良い刺激を得ることが出来た。

今回の研修で、医師としての患者さんとの関わり方や、他の医療従事者との関わり方、地域医療における病院の役割など、今まで考えていなかったことについて考える機会を得られたことは、私にとって、これから医師となって働くという明確なビジョンを持つ良いモチベーショ

ンになったと思う。そして、より一層、学業に励んでいきたい。

4. 謝辞

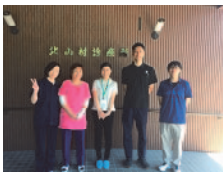
最後になりましたが、お忙しい中私達のために時間をつくって下さった院長の山本先生、中村事務課長、その他那智勝浦町立温泉病院の先生方、事務の方々、この度は研修を行わせていただき、誠にありがとうございました。貴重な体験をたくさんさせていただき、大変有意義な2日間を過ごすことが出来ました。研修で得られた体験を糧に、今後はより一層学業に取り組んで行く所存です。ありがとうございました。

10 国保北山村診療所



位置 和歌山県東牟婁郡北山村大字大沼 312

夏期研修報告



実習場所: 国保北山村診療所
実習期間: 2018年8月16日(木)、17日(金)
自治医科大学医学部4年 岡本恵里花



国保北山村診療所の概要

- ・国保北山村診療所は村で唯一の医療機関
- ・主たる検査機器
 - ・ X線装置 (*自分で撮影)
 - ・ 心電図装置
 - ・ 超音波診断装置
 - ・ 上部消化管内視鏡装置 など



* 血液検査の多くは外注 (結果は翌日以降)

医療について

- ①南紀在宅ネットワーク
...新宮市立医療センターによって作られたシステム



北山村では、新宮市立医療センター、北山村診療所、役場、社協がグループになって情報共有している

実習内容

- 8月16日(木)
 - ・ 外来見学
 - ・ 調剤の見学
 - ・ 社協の説明
 - ・ 往診見学



〈診察室のようす〉

- 8月17日(金)
 - ・ 社協の介護予防教室

医療について

- ②遠隔診療
...遠方で大きな医療機関まで行けない患者さんや専門家のアドバイスがほしい患者さんのために和医大と連携して行っている。
(例)皮膚科の診療
栄養士の栄養指導



保健について

- ・ あいべ 元気ポイント
- ...病氣、けがの予防のために行っている運動をポイント化し地域全体で予防医療の意識を高める目的 (ウォーキング、ロクトレなど)



多田先生の取り組み

- ・ 住民同士の声の掛け合い、気遣い合い
- ・ 自らもイベントに参加
あいべポイント、介護予防教室
- ・ 一人一人が納得した医療の受け方ができるように工夫する
遠隔診療、訪問診療など
- ・ 予防医療に力を入れる
行政と協力する
- ・ 診療所の職員の確保
- ・ 診療所の医師の負担
軽減気兼ねなく研修に行けるように隣の村と協定を結ぶ、看護師の教育

介護について

- ・ ケア会議
- ...北山村診療所、隣接する北山社協、役場住民課が合同で2週に一度行なっている。気になる村民のケアカンファレンスを行い情報を共有する。一度の会議で5~7人程



ご清聴ありがとうございました

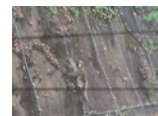
実習中ご指導くださいました多田先生はじめ診療所の看護師さん、事務の方々、ご協力下さいました北山村の皆様にご感謝いたします、ありがとうございました。



〈野生の合戦〉



〈二宮金次郎像〉



〈野生の猿〉

県外研修

< 県外研修 >

平成30年8月8日(水)～10日(金)、8月19日(日)～21日(火)の間、それぞれ山口県の病院で、8月23日(木)～24日(金)には、自治医科大学で地域医療枠5年生が県外研修を行った。

参加者名簿

病院・診療所研修・県外研修 和歌山県立医科大学 地域医療枠

研修先	学年	氏名
自治医科大学附属病院	5年生	貝持 裕太
	5年生	串 雅紀
	5年生	坂野 真美
	5年生	立石 華穂
	5年生	林 菜摘

研修先	学年	氏名
下関市立豊田中央病院	5年生	川端 公貴
	5年生	小畑 智彦



1 自治医科大学附属病院



位置 栃木県下野市薬師寺 3311-1

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠5年生 貝持 裕太

1. 研修施設とその地域の概要

研修施設：自治医科大学附属病院

自治医科大学附属病院は栃木県下野市に位置する、病床数 1,132、診療科 46 科をもつ大学病院である。

自治医科大学は、医療に恵まれないへき地等における医療の確保及び向上と地域住民の福祉の増進を図るため、昭和 47 年に全国の都道府県が共同して設立された。

一般的な症例から専門的な症例まで、幅広い症例が取り扱われていた。

地域の概要

自治医科大学が位置する下野市は、栃木県南部の人口約6万人の市で、豊かな自然環境に恵まれている。

かんぴょうなどの農産物を特産品として多く扱っており、市区の類型としては住宅都市の形態をとります。近くに県庁所在地である宇都宮市もあり、下野市から宇都宮市に通勤・通学する人も多いようだ。

下野市を含む県南保健医療圏は人口が約48万人で、栃木県全体の約25%を占めている。この医療圏には自治医科大学と獨協医科大学があり、1,000床以上の大学病院が2つあるという極めて特殊な医療圏で、近隣医療圏からの患者流入が多いことが特徴としてあげられる。

2. 研修内容

今回の研修では1日目に総合診療科を、2日目にICUを見学した。

1日目の総合診療科では、朝のカンファレンスから参加した。カンファレンスでは、神経内科的な疾患や循環器内科的な疾患など多岐の診療科にわたる症例が議論されていた。その後、午前中は外来見学をした。外来もまたカンファレンスと同様、様々な疾患の患者や複数の疾患を同時に管理しなければならない患者が多く来院していた。また、新患対応では、ほかの科では原因がはっきりとわからなかった患者が来ることが多く、一筋縄ではいかないような症例に対して診察が行われていた。午後からは病棟を見学した。病棟も外来と同様に、様々な疾患の患者が入院しており、様々な病態に対する知識が必要だと教えていただいた。最後に、総合診療科の先生に総合診療科の紹介をしていただき1日目を終えた。

2日目のICUも同様にカンファレンスから参加させていただいた。カンファレンスではICUの先生だけではなく、患者の症例ごとの専門の診療科の先生方も参加して今後の対応について話し合われていた。自治医科大学では日本では珍しい、ICU専門の医師が患者を管理するclosed ICUという形態をとって患者に対応していると教えていただいた。そのため、ICUの医師と他科の医師との意見交換や連携が重要となるとのことだった。カンファレンスの後は、午前、午後ともにICUの業務を見学させていただいた。全身管理を中心として、気管挿管などの必要な処置を行っていった。ここでも他科の先生と協力して処置を行う場面が多くみられ、他科との連携がとても重要な診療科だと実感した。

3. 考察

今回の病院研修では、和歌山県立医科大学にはない総合診療科の見学や、全国的にも珍しいclosed ICUの見学など、非常に貴重な体験をすることができた。特に、総合診療科に興味はあったのですが漠然とした認識しかなかったものが、今回の研修で見学や先生のお話を通してより

認識を深めることができたと思う。今回は初めての病院見学だったのですが、ポリクリをしているだけではしないであろう経験をたくさんさせていただいた。今後医療従事者になるうえでとても良い経験ができたと思う。

4. 謝辞

最後になりましたが、今回お世話になった自治医科大学の先生方、スタッフの皆様に深くお礼を申し上げます。この研修で学んだことは、今後の学習や業務にかならず役立つと確信している。本当にありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠5年生 串 雅紀

1. 研修施設とその地域の概要

自治医科大学附属病院は、北関東医療圏である栃木県、茨城県西部、埼玉県北部の地域医療を支える基幹病院である。現在の許可病床数は1,132床、診療科は46科となっている。2016年3月に公表された栃木県の地域医療構想で、2025年問題を踏まえて、今後の医療提供体制整備には「医療機関の機能分担」と「連携」が強調されている。ひとつの医療機関で提供できる医療には限りがあるため、自治医科大学附属病院では栃木県内を中心に多くの連携病院にスタッフを派遣し、手術連携病院を組織し、自治医科大学関連病院群として、より多くの患者さんに質の高い均一な医療を提供できる体制を整えている。自治医科大学附属病院自体も現在、新館の建設が進んでおり、より多くの患者さんに高度な医療を提供できる環境づくりが常に行われていた。

2. 研修内容

1日目

1日目は総合診療内科で研修を行った。朝のカンファレンスから参加し、その後は外来診療を見学した。午後には総合診療内科の病棟見学を行った。そのあとは外来のカンファレンスに参加し、その日のまとめとして先生とお話して終了となった。

2日目

2日目は循環器内科で研修をした。循環器内科ではその日研修医の稲葉先生に1日ついて病棟業務を見学し、病棟の入院患者さんのルート取りや採血、中心静脈カテーテルの挿入の見学などをした。

3. 考察

今回地域医療研修の一環として、自治医科大学附属病院の見学をして、大変見聞が深まった。今まで県内の研修のみでおおよそ知っている土地での研修、見学だったので、県外の全く知らない土地での研修は全く知らないことを知ることができた。

まず1日目では総合診療内科ということで、和歌山県立医科大学にない診療科を見学することができた。見学を行うまでは総合診療内科はとりあえず最初に診察をしてから、他科に紹介するような感じなのかと勝手に想像していたのだが、実際は全く異なっていて、他科から総合診療内科に紹介が来ることも多く、今までの専門性とは異なる分野の専門性であることが分かった。先生のお話を聞くとところによると、「だるい」などといったどの科に行ったらいいのかわからないような主訴や、軽度の肺炎などの症状であると総合診療内科になるとのことだった。私はこの話を聞いて、大学病院の総合診療内科ではあるものの、地域の病院の内科のようなこともしているのだなと思った。外来見学したのは3時間ほどと短い間でしたが、様々な主訴の患者さんが来たことがすごく印象に残っている。午後の病棟見学では最初、心エコーの見学の予定だった。しかし緊急入院の患者さんが来られたので、そちらの診察等を見学をした。緊急入院の患者さんは髄膜炎疑いの患者さんだった。その点でも総合診療内科の特色が出ているような感じがした。時間の都合上、腰椎穿刺までは見ることは出来なかったが、学内の実習ではあまり見ることはできない段階から手技を見学することが出来て、いい経験となった。

2日目は循環器内科の研修医の稲葉先生について病棟業務を見学した。研修医の先生は10人ほどの患者さんを担当しているとのことで、様々な症状、病態の患者さんを受け持っていて、見学の私にも聴診の機会を下さったり、MMSEを取らせていただく機会をいただいたりと様々な経験をした。また中心静脈カテーテルの挿入する場面の見学もさせていただいた。実際に近くで中心静脈カテーテルを挿入する場面を見たことはなかったので、大変いい見学になった。稲葉先生には一日お忙しい中様々なことを教えて頂き、大変勉強になり、自分のためになった。

自治医科大学附属病院では研修医の先生は様々な県外の大学から研修に来られていることが多く、いろいろな大学の話を聞くことが出来て、大変興味深いお話も聞けて良かった。他の大学病院とは全く違う環境であることを実感した。そういった環境で研修をすることも医者として一人前になるには良い手段であると感じた。

4. 謝辞

最後になりましたが、自治医科大学卒後臨床研修センターの方々、総合診療内科の山本先生、神谷先生、循環器内科の藤原先生、稲葉先生をはじめとする自治医科大学附属病院の皆さまにはお忙しい中大変お世話になりました。お忙しい中でしたが温かく受け入れていただき、多くのことを教えて頂き、経験もさせていただき、ありがとうございました。この度の研修で

将来和歌山の地域医療に携わることに、より一層興味ややる気を持つことができ、とても有意義な研修となりました。和歌山県立医科大学の地域医療枠の医師として総合的な内科診療を出れば良いなと思う研修でした。

研修で学んだことを活かしてこれからも日々の勉学に励んでいきます。本当にありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠5年生 坂野 真美

自治医科大学附属病院

1. 研修施設とその地域の概要

自治医科大学附属病院は栃木県南医療圏の基幹病院であり、許可病床数 1,132 床、46 診療科の特定機能病院である。栃木県内だけでなく、周辺の隣接県医療圏（茨城県筑西・下妻医療圏、古河・坂東医療圏、埼玉県利根医療圏など）からの受診者も多く、医療提供体制の充実に努めている。2017 年の入院患者数は延べ 323,487 名、外来受診者数は延べ 629,134 名と大変多くの方に受診されている。大学病院であるとともに地域基幹病院でもある当院では高度先進医療から救急症例まで多彩な症例に対応でき、地域医療をしっかりと支えている。自治医科大学附属病院の理念は①患者中心の医療②安全で質の高い医療③地域と連携する医療④地域医療に貢献する医療人の育成の 4 点であり、この理念に基づき高度かつ先進的な医療を安全に提供すべく、開かれた病院運営を行っている。また、医療機関の連携を重要視しており、栃木県内を中心に多くの連携病院にスタッフを派遣し、手術連携病院を組織し、自治医科大学関連病院群として、より多くの患者さんに質の高い均一な医療を提供できる体制を整えている。

栃木県南医療圏は 3 市 4 町を診療圏域とし、人口は 482,270 人と栃木県内では宇都宮医療圏に次いで多い。

2. 研修内容

〈8 月 24 日：小児科〉

1 日目自治医科大学の広大な敷地内を歩き集合場所に到着した後、医局に案内されると先生方が温かく迎え入れてくれた。ほっとしたのもつかの間、PICU でカンファレンスをするということで、PICU に移動した。PICU とは小児の集中治療室のことであり、先天性心疾患患者の周術期管理をはじめとして、合併症を持つ患児の外科手術後の管理や、痙攣重積発作などの内科的重症疾患患児の全身管理を担当し、集中治療を行う場であると説明を受けた。カンファレンスは小児外科だけでなく関連する各科と合同で行い、先生方は真剣に患児の状態や治療につ

いて意見を出し話し合っていた。また、看護師や他の医療スタッフとも頻繁に連絡を取り合っており、危機的な状況に陥ってしまった小児たちの医療はこのように患者を中心とした医療者の連携によって支えられているのだと感じた。

その後、肺動脈弁狭窄症の児に対する経皮的バルーン肺動脈弁形成術の見学をした。見学をしてみず、医師の多さに驚いた。小児科は医者が不足しており激務というイメージがあったのだが、自治医科大学小児科が診療をしている「とちぎ子供医療センター」では医師が豊富で小児科の中でも各分野の専門医がそろっていて、患者に質の高い医療を提供できる体制が整っていることが分かった。見学している最中も多くの医師の方が患児の病気や治療について丁寧に説明してくださり、理解を深めることができた。手技はしっかりと確認をしながら慎重に行われ、無事に終了した。

外科治療の見学をした後は、病棟内の患者についてのカンファレンスに参加した。自治医科大学小児科では各チーム3～5人体制で10人前後の患者を診療する診療体制であり、少人数で患者についてしっかりと話し合っていた。私は今まで大人数で大量の患者について話し合うカンファレンスをみる機会が多かったので自治医科大学の少人数のチーム体制は新鮮であったが、患者1人1人についてじっくりとカンファレンスができ、意見や質問などもききやすい雰囲気だったのでこのような体制も良いなと感じた。

午後からは小児科主任教授である山形先生から小児科についての説明をして頂いた。教授から見学の感想を求められ、まず頭に浮かんだのは施設の広さであった。とちぎ子供医療センターは地上4階、地下1階建てで病床は計135床ある。手術、PICUの機能のほか、岡本特別支援学校の分教室や多目的スペースがある。外来も多くの専門分野に分かれており、部屋数も非常に多く驚いた。壁や机などは可愛らしいデザインが施されて、とても居心地の良さそうな空間となっていた。研究設備も充実しており難治性疾患や発達障害の病院解明など多くの課題で成果を挙げている。スタッフも豊富で魅力のある病院だと感じた。

その後は病棟回診の見学と施設の案内をして頂き、1日目の見学を終了した。小児科の先生方の熱意や温かさをこの1日で感じる事ができた。

〈8月25日：内分泌代謝科〉

見学2日目はまず病棟回診を見学した。小児科と同様各チーム2～4人で患者をみる体制である。回診前にカルテで検査値などを確認してから病棟へ移動した。内分泌代謝科では血糖値の値や血圧、脂質などを把握しておくことが重要なのでカルテのチェックは入念に行った。患者の様子を見に行くと、ちょうど看護師と他科の医師が患者の話を聞いているところであり、私たちも一緒に話をきいた。担当してくださった先生は他科の医師や看護師とその場で患者について議論し、考えを共有していた。前日の研修に続き、ここでも医療者同士の連携が頻繁に行われていた。先生は患者に対して穏やかな口調で話しかけ、患者も気兼ねなく自分の気持ち

を伝えられていたようにみえた。普段からこのようにコミュニケーションをとることを大事にしているのだろうと感じた。病気についての話だけでなく、プライベートな話もあり、信頼されていることが伝わった。

次にカンファレンスや問診などに参加した。その後血糖値測定器を使って、自分の血糖値を測る体験をした。ちゃんと説明書を読みながら行くと、すぐに測定できた。高齢者の方はうっかりどこかの工程を忘れてしまったり、機械に表示された数値が読めないなどの問題があるため、より簡単に使えるような機器や文字が大きくみえるように工夫された機器もあるそうだ。この体験や先生のお話から糖尿病患者の毎日血糖値を測ったり、食事や運動に気を使ったりといった生活を想像することができた。

〈考察〉

私は今まで県外の病院を見学したことはなかったが、今回外の病院を見学できてとても良かったと思う。自治医科大学附属病院で働く皆さんは患者を中心とした医療を実現していると感じた。患者とのコミュニケーション、医療者同士の連携、少人数で患者1人1人に手厚い医療を提供している点など、多くのことを見て医療においてどれも大切なことだと実感した。医師の労働時間の長さや過酷な労働が問題だという主張や、医師として働いている先輩などが余裕なく必死に働いているという話をきいたことがあるが、自治医科大学附属病院の先生方は心に余裕をもって、患者さんをしっかりみているように感じた。回診や問診もとても丁寧で優しさに溢れていて、理想の医療の提供の仕方だと思った。将来和歌山でこのような医療人になりたいと強く思った。

〈謝辞〉

今回の研修でお世話になったたくさんの方々には感謝の気持ちでいっぱいです。どの科の先生も患者さんについて丁寧に教えて下さったり、色々な場に参加させて下さりとても充実した2日間でした。今後この体験を活かし、良い医師になれるよう頑張ります。本当にありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療科5年生 立石 華穂

1. 研修施設とその地域の概要

○病院の概要

自治医科大学附属病院は、北関東医療圏（栃木県、茨城県西部、埼玉県北部）の地域医療をしっかりと支える基幹病院である。1974年の開設後、医療の高度化、専門化に伴い、徐々に

診療科を追加し、2002年には外科系を中心とした8病棟と救命救急センター、ICU、中央手術部を擁する新棟を建設、2006年にとちぎ子ども医療センター、総合周産期母子医療センターを開設し、現在の許可病床数は1,132床、診療科は46科を標榜している。

外来患者数は629,134人(1日平均2,578人)、入院患者数は323,487人(1日平均886人)、平均在院日数13.8日、病床稼働率88.2%、手術件数は9,132人、救命救急センター患者数は13,121人である。

疾患毎に診療機能の拡充を図り、栃木県と周辺医療圏における医療需要増加の受け皿となっている。また、医療の高度化にも積極的に対応しており、先進医療も行われている。

○地域の概要

栃木県は関東地方北部に位置する。県庁所在地は宇都宮市で、県内には日光国立公園が立地し、日光・那須などの観光地・リゾート地を有する。人口は約198万人である。

地勢は、北部から北西部にかけて奥羽山脈、日光連山、足尾山地が連なり、標高1,500m-2,500m程の急峻な山岳が連なっている。これらの山々から流れ出る鬼怒川、那珂川、渡良瀬川等諸河川が関東平野の北端を形成し、更に北に進むと那須野が原に至り、県北の町並みが広がる。

県土のほぼ中央に宇都宮市が立地し、人口は県全体の4分の1に当たる約50万人が集中している。そのほかは、県南の小山市、栃木市、足利市、佐野市、県北の那須塩原市が10万人以上の人口を抱えている。県南に人口の多い市が連なる。

自治医科大学付属病院の位置する栃木県下野市は、栃木県南部に位置する人口約6万人の市である。宇都宮市、小山市、栃木市、真岡市などが隣接している。

2. 研修内容

私は今回、1日目は臨床腫瘍科、2日目は感染症科にて病院見学をさせていただいた。

○1日目 臨床腫瘍科

午前 外来見学

午後 外来・病棟見学、カンファレンス、回診見学

○2日目 感染症科

午前 ICU、病棟見学

午後 病棟見学、合同カンファレンス見学

1日目臨床腫瘍科では、9:00-13:00まで山口先生の外来を見学させていただいた。さまざまな悪性腫瘍の患者さんに対して、現在行っている治療がどれだけ効果があるか、副作用が出現していないか、副作用が重く休薬している方には、休薬を続けるのか、それとも服薬を再

開するのかを評価していたり、どの治療選択を行うのか患者さんが出した考えを聞いたり、非常に内容の濃く、患者さんの人生に直結するような症例が多かった。

14:00-16:00は山口先生に付き、外来と病棟を行き来して、患者さんや家族さんに治療について説明するのを見学した。16:00-17:30は臨床腫瘍科の症例カンファレンスを見学した。医師だけでなく、看護師さん、薬剤師さん、臨床心理士さんといった多職種の医療関係者が参加したカンファレンスだった。その後は病棟回診について行った。

2日目感染症科では、午前8:30-9:30は大西先生と研修医の小野先生に付いて、ICUで、感染症科がコンサルタントを受けた患者さんの説明を受け、救急とのカンファレンスを見学した。また、ICUにいる破傷風の患者さんについて鈴木先生から説明を頂き見学した。破傷風の患者さんを見るのは初めてだったので、貴重な体験だった。また、感染症科の観点から手袋装着などの感染防御で気をつけることを教えていただいた。9:30-11:00は大西先生と小野先生に付いて病棟に行き、担当患者さんについて説明をうけてから、診察を見学し、実際に聴診をさせていただいた。11:00-12:00、13:00-14:00は小野先生に付いて電子カルテを見ながら、その日に感染症科にコンサルタントがきた患者さんについて説明していただいた。

14:00-14:30は救急との合同カンファレンスを見学し、14:30-15:45は小野先生から患者さんについての説明をうけたり、鈴木先生にそれに関連する細菌や抗菌薬について教えていただいた。15:45-16:10は大西先生と小野先生に付いて病棟に行き、先程説明した患者さんへの問診と診察を見学した。

3. 考察

臨床腫瘍科では、山口先生の忙しくても、とても丁寧な説明と柔らかな口調、患者さんに寄り添った態度が印象的だった。もう治療方法がなく緩和ケアを行うしかない患者さんや、いくつか治療選択があるもののそれぞれ副作用が出る可能性があり、どの治療を行うかを決めなくてはならない患者さん、人格障害がある患者さんなど、さまざまな患者さんがいた。その中で、患者さんと家族さんそれぞれの人生や価値観があって、どう考えて結論付けるのか、その場面に立ち会うことができ、貴重な体験となった。このようなお話をする際には信頼関係が成り立っていないとできないのだということを改めて感じた。患者さんは強い化学療法を続けた方が効くという風に考えている方が多く、生きたいからと言って、副作用が強く出現した無理な化学療法を行うことがその人にとって良い治療となるわけではない。副作用が強く出ているのなら一旦休薬して、体力が回復するのを待った方が良く、レジメンを厳格に行うのではなく、レジメンをベースとしたその人に合わせた治療を行うのが大事だと感じた。

また、臨床心理士さんや薬剤師さんとの連携が良く取られており、カンファレンスも多職種の医療関係者が参加して、多方面からの考えを聞くことができ、特に臨床腫瘍科では患者さん

や家族さんの心理面を大事にされていると感じた。

感染症科では、感染症での抗菌薬投与の考え方、どのようにアプローチするか、何に気をつけるべきか、感染源をどう考えるかを学ぶことができた。感染症は特定の臓器だけでなく、全身を見ないといけないため、幅広い知識が必要だと感じた。同じ感染症であっても患者さんの背景の違いによって使うべき抗菌薬が変わって来たり、症状などによって想定した疾患に合った特殊な問診を行う必要がある。どれだけ鑑別診断をあげることができるか、問診や診察、検査で除外できるか、検査で陰性と出ても偽陰性の場合があり、どこまでその可能性を残しておくか、といった難しさを感じた。

救急との合同カンファレンスでは、救急の先生方から抗菌薬投与などについて疑問点を話し合っており、さらに、個別でも主治医の先生と方針を決定するために話し合ったりと、他科との連携の重要性を感じた。他科からコンサルタントを受ける感染症科では、このような話し合いや質問ができるより良い関係作りが大切になるのだろうと思った。

今回の研修では大変貴重な時間を過ごすことができた。地域医療というわけではなかったが、和歌山県立医大と別の大学病院の違いを感じる良い機会となったし、先生方から自治医大の学生の話聞くのは良い刺激となった。今回の体験を糧としてより良い医師になることができるように今後もより一層頑張りたいと思う。

4. 謝辞

最後になりましたが、今回病院見学のために貴重な時間を割いて下さった、山口先生をはじめとする自治医科大学附属病院 臨床腫瘍科のスタッフの皆様、大西先生、鈴木先生、藤村先生、小野先生をはじめとする感染症科のスタッフの皆様、日程調整等でお世話になりました自治医科大学附属病院 卒後臨床研修センターの皆様、今回の研修を企画して下さい地域医療支援センターの皆様には厚く御礼申し上げます。大変良い経験ができました。本当にありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 5 年生 林菜摘

1. 実習施設とその地域の概要

自治医科大学附属病院は、北関東医療圏（栃木県、茨城県西部、埼玉県北部）の地域医療をしっかりと支える基幹病院です。1974 年の開設後、医療の高度化、専門化に伴い、徐々に診療科を追加してきました。2002 年には外科系を中心とした 8 病棟と救命救急センター、ICU、中央手術部を擁する新棟を建設しました。2006 年にとちぎ子ども医療センター、総合周産期

母子医療センターを開設し、現在の許可病床数は1,132床、診療科は46科を標榜しています。とちぎ子ども医療センターは、建物は、地上4階、地下1階建てで、附属病院の本館・新館とは、地下通路及び3階の渡り廊下で接続しており、附属病院の機能をできる限り共有することとしているようだ。和歌山県立医大病院にはない子どもの心の診療科、小児・先天性心臓血管外科、小児泌尿器科、小児整形外科などがあり、特に小児関連に力を入れている病院である。

医師数は750名、指導医374名である。

2. 研修内容

1日目は、とちぎ子ども医療センターにある小児科で研修した。とちぎ子ども医療センターは、小児科だけでなく各分野に細分化されており、小児外科、形成外科、移植外科、小児脳神経外科、小児・先天性心臓血管外科、小児整形外科、小児泌尿器科、子どもの心の診療科、小児歯科・口腔外科、小児耳鼻咽喉科がある。午前中はPICUでのカンファレンスを見学した後、小児・心臓血管外科で、肺動脈狭窄症に対する心臓カテーテル治療の見学をした。実際にカテ室内で、治療について細かく説明してくださった。その後、小児科のチームカンファレンスに参加した。午後は病棟や外来などの見学もした。その後、山形主任教授と直接お話をする機会をいただいた。最後には、午前とは別のチームのカンファレンスも参加した。

2日目は、産婦人科で研修した。午前中は、生殖内分泌部門で、人工授精、採卵、移植、子宮内ポリープに対するTCRの見学をさせていただいた。その後医局で先生方とお弁当を食べたり、松原主任教授と直接お話をする機会もいただいた。最後に、産婦人科病棟と婦人科病棟の見学をして、産婦人科病棟では生まれて間もない新生児を抱かせていただいた。

3. 考察

まず感じたことは施設の広さ、スタッフの多さである。いままで和歌山県以外の病院で見学をしたことがなく、自治医科大学附属病院の規模の大きさに大変驚いた。また、分野ごとに科が細分化されており、それぞれ専門をもった先生方がたくさんいて心強い印象を受けた。それはスタッフが多いからこそできることであり、下位の先生方への指導も行き届いていて大変素晴らしいと思った。また、スタッフ同士でお互いの仕事を把握しあい、それぞれの仕事を分担している場面もよく見かけた。それはスタッフが多いからこそ心の余裕が生まれているのだと思った。

また、医師同士だけでなく看護師などのコメディカルとの連携もきちんととれていて、医療者として働きやすい環境が備わっているなど感じた。

小児科で印象に残っているのは、産休や育休だけでなく育児短時間勤務制度や部分短時間勤務などが充実していて、女医としてとても働きやすい環境にあることだ。女医の比率が高いの

も納得がいった。また、小児科の先生方は優しいかたが特に多い気がした。純粹に子どもが大好きで、病棟見学に行く際も優しく声掛けしていたのがとても印象的だった。

産婦人科で印象に残っているのは、チーム内の仲の良さである。小児科のチームも仲の良さはもちろん伝わってきたが、産婦人科のチームは立場関係なく尊敬しあっているように感じた。産婦人科でも、仕事が多く困っている先生がいたら、他の先生が代わりに仕事をやるという助け合いの精神が立場関係なくみられ、とても働きやすい職場だと感じた。

2つの科を通じて思ったことは、自治医科大学附属病院の先生方がとても優しく下位の先生の成長のために尽力してくださるとても良い先生ばかりだということである。私も今後そのような先生になれるよう努力しようと思った。

4. 謝辞

最後になりましたが、今回は和歌山県下の病院では体験できないような規模の大きく専門性の高い医療を見学させていただきありがとうございました。山形主任教授をはじめとする「とちぎ子ども医療センター」のスタッフの皆様、松原主任教授をはじめとする産婦人科のスタッフの皆様、そして本研修を企画、サポートして下さった自治医科大学附属病院の卒後臨床研修センター藤田さんにこの場を借りてお礼を申し上げたいと思います。本当にどうもありがとうございました。この研修で得たことを忘れることなく、今後に必ず生かしていきたいと思う。

2 下関市立豊田中央病院



位置 山口県下関市豊田町大字矢田 365 番地 1

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 5 年生 川端 公貴

1. 研修施設とその地域の概要

私は今回の研修で、山口県下関市にある豊田中央病院を見学した。豊田中央病院は JR 小月駅からバスで 40 分ほどの山あいにある。下関市の北部で、北は長門市、東は美祢市に接する位置にあり、医療圏としては下関保健医療圏にあたる。旧豊田町の殿居、旧豊北町の角島の 2 診療所を管轄している。常勤医師は現在、内科 4 名、眼科 1 名で病院及び診療所の診療を行っており、外来の診療科目は、内科・外科・泌尿器科・整形外科・脳神経外科・小児科・眼科・リハビリテーション科がある。特に眼科設備は充実しており、山口県内でも有数の施設で、下関市以外からも数多くの患者様が来院され、治療を行っている。病床数は 71 床あり、一般病棟 60 床 (内、包括ケア病床 12 床)、療養病棟 11 床となっている。

高齢化が進んでいる地域なので、患者さんは高齢者が中心である。

2. 研修内容

1日目は、訪問リハビリテーション同行、オリエンテーション、角島診療所見学、外来見学、病棟見学を行った。

2日目は早朝のラウンド、外来見学、往診を行った。

最初の訪問リハビリテーション同行に関しては、普段の病院実習では訪問リハビリなどの見学などできず、今回の実習で患者さんの退院後のADL維持・改善する経過を知ることができた。二人の患者さんのリハビリの見学をしたが二人ともリハビリに積極的であったため治療に積極的な県民性があるのではないかと感じた。

次に角島診療所の方に見学をした。角島診療所までは、車で40分ほどで着き、観光で有名な角島大橋を渡った。患者の数が少なく診察の見学を行うことができなかったが、診療所のことや島のことについてお話を伺うことができた。角島大橋ができるまでは離島であり、本土の病院まで送るのに船を使わないといけなかったため診療所内で検査、治療できるような設備は整っていたそうだが、角島大橋ができてから救急車で運ぶことができるので今は基礎疾患に対する治療を行うことが中心になっているというお話を聞いて角島大橋の開通で診療所の役割が変わるのだと実感した。

1日目、2日目の外来見学、病棟研修をした。高血圧、糖尿病、脂質異常症などの生活習慣病の患者さんが多い事が印象的だった。また必要に応じて専門医に紹介する力が必要だと感じました。普段の病院実習で体験することができない動脈血、静脈血の採血やルートをとらせていただく貴重な体験をした。やはり総合医には幅広い知識がいることが外来の見学を通して改めて実感した。

3. 考察

今回の初めての県外研修を通して印象に残ったことは、どこの地域においても地域医療の役割は変わらないことだった。また自治医大卒後3年目の先生と同行し、卒後地域で働くうえで求められる技能など間近に見ることができたのでこれから将来のことも見据えて勉強をしていかなければならないと実感した。

4. 謝辞

この2日間お忙しい中、研修を受け入れて下さった陣内先生、医局の方々、倉本事務局長、事務局の方々、そして研修の機会を頂いた豊田中央病院の皆様、今年から始まった県外研修にご協力して頂きありがとうございました。

また研修を企画してくださった地域医療支援センターの皆様はこの場をかりて厚く御礼申し上げます。今回の研修で学んだことを活かして今後の勉強や研修に取り組んでいきたいと思う。ありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療卒5年生 小畑 智彦

1. 研修施設とその地域の概要

8月8日から8月10日まで下関市立豊田中央病院を中心に角島診療所、殿居診療所で地域医療研修をした。豊田中央病院は昭和27年9月に豊浦中央病院として発足し、診療科は内科、外科、産婦人科であった。昭和28年7月には普通病床20床及び給食棟を増設し、診療科目に小児科が加わった。昭和33年には普通病床を21床に増設し、昭和36年3月には普通病床を30床増設し、昭和41年3月には診療棟および管理棟を鉄筋コンクリートに改築された。昭和43年4月には看護師宿舎を管理病棟2階に増築し、同年4月に診療科目に眼科が加わった。平成7年4月に診療科目に整形外科、リハビリテーション科を加え、同年11月に病院全面改築された。平成11年4月には一般病床71床を一般病床53床、療養病床を18床へ変更し、2病棟体制となる。平成16年12月には眼科診療棟と眼科病室を増築し、一般病床を53床から45床、療養病床を18床から26床へ変更された。平成17年2月、下関市と豊浦郡4町が合併し、病院名称を「下関市立豊田中央病院」となり現在に至る。現在は内科医3人で整形外科や泌尿器の先生が週1回程度、外病院から来る形になっている。

角島診療所は昭和38年4月に豊北町角島に「豊北町国民健康保険角島診療所」として開設され、診療科目は内科、外科、小児科であった。昭和61年4月に全面改築し、鉄筋コンクリートになった。平成12年11月に角島大橋が開通し、救急車による救急患者の搬送が可能となった。平成17年2月に合併により診療所の名称を「下関市立角島診療所」と改称し、豊田中央病院の所属となった。殿居診療所は昭和28年11月に殿居村に豊浦中央病院の分院として発足し、平成15年4月に全面改築され、平成17年に合併により診療所名称を「下関市立豊田中央病院殿居診療所」となった。

医療圏としては下関保険医療圏というものに属しており、豊田中央病院で診られない患者は車で約40分程度に位置する病院に、角島などの診療所で診られない患者は豊田中央病院にというように、豊田町の中核病院としての役割を担っている。

2. 研修内容

研修内容としては8月8日に訪問診療に同伴した。訪問診療は身体疾患や認知症で移動が困

難な方や、自宅が遠方にある方、また家族や本人の希望により医師、看護師が訪問し、診察・処方を行うものである。患者ご本人やご家族にお話を伺い、体調や環境、希望に応じて個別に対応することができる。今回、患者さんの問診、バイタルチェックを行った。今回の患者さんは認知症の方、高血圧の方、肺がん骨転移の方をみた。まずは変わったことがないか本人に聞き、家族の方にも本人の変化や気づいたことを報告してもらおう。その後体温、酸素飽和度、血圧、呼吸数などのバイタルをチェックする。患者さんによっては寝たきりの方や座って過ごす方もいるので、その人に合った測り方を意識して行った。その後睡眠、排便、食事などの状況を聞き、医療者が情報共有するノートに記載し、薬の処方を行った。

8月9日は午前角島診療所、午後殿居診療所にて外来の見学をした。角島診療所は人口約800人が暮らす角島での唯一の診療所として角島住民の健康を守っている。スタッフ4人で運営しており、レントゲンの器具なども備わっている。外来ではあまり人が来なかった印象だが、日常的な病気や、慢性的な病気に関するフォローなど幅広く対応している印象があった。観光シーズンにはクラゲ刺されなどの患者が運ばれてくると先生がお話されていた。殿居診療所では状態が安定しており、豊田中央病院が遠くて通院が不便な患者さんが多かった。また、ほたるホームとよた、ケアハウスなどからの通院も多く、ある程度の検査や処置も行う。吉富院長の外来を見学させていただき、その中でエコー検査、排膿処置なども見せて頂いた。血液検査は血液だけ採って、検査は豊田中央病院で行った。

8月10日は救急外来、訪問看護、豊田中央病院での外来を見学した。救急外来では急性腹症を主訴にきた若い女性の問診と診察をした。まずは問診をし、その後圧痛や反跳痛なども見たが、特に異常はなかった。その後訪問看護に行った。訪問看護は患者さんを訪問し、バイタル測定や服薬管理、症状や全身状態の観察を行い、さらにベッドや器具の配置など、環境の調整も行う。訪問看護でも共通のノートで情報を共有し、問題があれば主治医に報告を行う。訪問看護は家庭環境を見ることができ新たな発見や患者自身に合った対応を行えるという利点がある。看護師さんがバイタルのチェックや環境整備をし、入れ歯を洗ったりする様子を見学させていただいた。それから帰ると外来の見学をした。外来の見学では、受診患者の特徴として、高血圧、糖尿病といった生活習慣病や慢性疾患の患者が多く感じた。初診の患者さんには実際に診察を行い、検査・処方、治療方針の決定も行った。

3. 考察

今回の研修で感じたことを考察する。訪問診療・訪問看護のように実際に家にお邪魔して行う医療を初めて経験でき、貴重な体験になった。バイタルのチェックなどOSCEレベルでしかしたことがなかったり、呼吸数の測り方を知らなかったりしたが、看護師さんの丁寧な指導により、大変勉強になった。また医師と看護師がその家の患者さんだけでなく家族とも仲が良く

信頼関係を築けていたことから、コミュニケーションの大切さというものが伝わった。角島や殿居の診療所では、定期的なフォローなども多いが、来院される患者さんが様々で、地域医療には、あらゆる科の知識とあらゆる手技ができる必要性というものを改めて感じた。同時に診療所の規模でできる医療の限界も感じた。救急や外来でも、運ばれてくる人、患者さんの病気や主訴が様々で総合診療としての必要性を感じた。救急では、いざ来て問診などをさせて頂いた時に的確にできず反省している。外来では、高齢者が多く、様々な家庭環境や交通状況があり、同じ疾患でも人によってアプローチや治療までもが変わり、教科書通りにいかないという医療現場を見れた。今回の研修では改めて医療関係者と患者、その家族との信頼関係の大切さを感じた。また患者さんの希望、普段の暮らしや生き方・考え方を踏まえた医療を考え、提供していけるような医師になる必要があると感じた。今回学んだことをこれからの勉強、または将来働く時に活かせるように頑張りたいと思う。

4. 謝辞

三日間という短い期間ではございましたが、温かいご指導、また温かい歓迎をしていただきありがとうございました。院長の吉富先生を始め、担当して下さった篠原先生、倉本事務局長、その他様々な方に多くのサポートをしていただき、感謝致しております。また機会があれば何かの交流ができれば良いと思います。

保健所研修

< 保健所研修の説明 >

平成 30 年 7 月 24 日 (火)、26 日 (木)、31 日 (火) に地域医療枠 1、2 年生が 6 グループに分かれ、保健所で研修を行いました。それぞれの保健所では、保健所の概要説明や所長先生のお話などを聞き、保健所の事業を見学しました。

和歌山県立医科大学 地域医療枠 1,2 年生 研修保健所



参加者名簿

保健所研修 和歌山県立医科大学 地域医療枠

研修先	学年	氏名
岩出保健所	2年生	貴田 理香
	2年生	村田 七海
	1年生	田中 利佳
和歌山市保健所	2年生	泉 裕太
	2年生	高橋 翠
	1年生	塩塚 諒
	1年生	百名 孝太
湯浅保健所	2年生	小西 朋樹
	1年生	板谷 耀平
	1年生	井上 涼介

研修先	学年	氏名
御坊保健所	2年生	荒木 彩加
	2年生	松本 和樹
	1年生	行岡 翼
田辺保健所	2年生	野久保翔太
	2年生	山本 宗汰
	1年生	高橋 文太
新宮保健所	2年生	谷地 晃
	1年生	田中日向子
	1年生	三並 桃佳

1 岩出保健所



位 置 和歌山県岩出市高塚 209

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 2 年生 貴田 理香

1. 研修施設とその地域の概要

岩出保健所は総務健康安全課、保健福祉課、衛生環境課の 3 つの課で構成されている。岩出市高塚に位置し、紀の川市と岩出市を管轄している。管轄区域の面積は 266.72km²、人口は 117,598 人となっている。紀の川市は多くの歴史遺産や文化財を有し、特産品として桃、柿、ぶどう、みかんなどが多く栽培されている。また、岩出市はカーネーションや観葉植物などを特産品とすると共に、多くの商業施設を有し、その立地から大阪からの買い物客も多い。管轄区域の高齢人口比率は約 25% であり、県平均の約 30% を下回っている。医療機関としては、公立那賀病院をはじめとする病院が 8 か所、医科診療所が 104 か所、歯科診療所が 50 か所、助産所が 5 か所であり、地域医療を支えている。

2. 研修内容

- 9:00～ 9:50 保健所研修の目標と内容について / 結核・感染症対策事業について
- 9:50～ 10:20 精神保健福祉事業について
- 10:50～ 11:20 精神の作業所の見学
- 13:00～ 13:40 健康福祉部・保健所の組織と役割及び総務健康安全課の業務について
- 13:40～ 14:20 保健福祉課の業務について
- 14:20～ 15:00 結核審査会の事前説明と見学
- 15:10～ 16:20 衛生環境課の業務について(食中毒発生事例への対応と薬物乱用防止対策)
- 16:20～ 17:00 総括

3. 考察

今回の研修を通じて、保健所がいかに地域住民の健康と福祉を支える重要な役割を果たしているかを感じることができた。また、昨年の研修で訪問した御坊保健所とも比較しながら学ぶことができたのは非常に有意義なことだった。精神疾患を患っている方々が働く作業所を見学させて頂いた時に、保健所の職員の方と作業所の職員の方、そして精神疾患患者さんが親しげに話しているのを見て、施設同士がしっかりとコミュニケーションをとることで強い連携が成り立ち、地域の福祉を支えることに繋がっているのだと感じた。また、和歌山県全体としては高齢化が進む中、岩出保健所の管轄区域は高齢人口率が県平均よりも低いからこそその取り組みもあると思われる。その1つが、薬物乱用防止対策である。やはり高齢者よりも若齢者の方が薬物に手を出してしまうことが多く、若者が多い地域では薬物乱用に対する啓発や取り組みは必要不可欠であると思われる。今日では、子どもでさえ薬物を入手できる環境があるため、こうした取り組みは子どもの将来を守る非常に重要な役割があると感じた。また、結核に対する取り組みも力を入れていると感じた。昨年の研修では、和歌山病院でのDOTSカンファレンスも見学したが、今回はそれよりは規模の小さい結核審査会を見学できた。DOTSカンファレンスのような大きい場での情報共有も大切だが、隣接する地域同士など小さい場でのより頻度の高い情報共有の重要性も感じた。

4. 謝辞

最後に、今回お忙しい中、私たちの研修のために貴重な時間を割いてくださった雑賀博子保健所長をはじめとする岩出保健所の職員の皆様、そしてこの研修を計画してくださった地域医療支援センターの先生方にこの場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療科2年生 村田 七海

1. 岩出市の概要

この地域は、江戸時代は紀州藩領であり、徳川御三家の領地として着実な繁栄を築いた。明治に入り、町村施行により岩出村、山崎村、根来村、上岩出村が設立し、明治41年には岩出村が町制を施行し、岩出町となった。さらに、昭和31年9月30日に岩出町、山崎村、根来村、上岩出村及び小倉村の一部（船戸、山崎）が合併して新制「岩出町」となった。合併当時の人口は、13,261人であったが、その後、既成集落周辺での宅地開発やニュータウン開発などが進み、人口は騰勢を強めた。平成18年4月1日には、住民の永年の念願であった市制を施行し、「岩出市」として、新たな時代の幕開けを迎えた。

岩出市は、和歌山県の北部に位置し、和歌山市の中心部から約15km、大阪都心部から約50km、関西国際空港からは約30kmの距離にあり、北は大阪府泉南市及び阪南市、東南は紀の川市、西は和歌山市に接している。和歌山市や泉南地域、大阪都市圏への交通アクセスに恵まれており、大阪側から、また海外から関西国際空港を経て和歌山に至る玄関都市として位置づけられる。平成30年6月末日現在、岩出市は総人口53,838人、世帯数22,791世帯、面積38.51km²である。

2. 研修内容

まず、保健所長の雑賀先生から保健所研修の目標と内容について説明があった。その後、総務健康安全課の寺西副主査から結核・感染対策事業について講義を受けた。そして、精神福祉事業について説明を聞いた後、保健所から粉河へ移動し、社会福祉法人 筍憩会の運営するB型作業所「若葉作業所」を見学した。

3. 考察

結核・感染対策事業についての講義では感染症の定義や感染症発生時の対応、HIV検査等について知ることができた。法律で規定されている1～5類感染症の違いを説明していただき、まだ大学で習っていない詳しいことまで知れたのがとても有意義だった。

精神福祉事業の説明では、A型作業所とB型作業所の違いがよく分かった。講義を受けるだけでなく実際にB型作業所の若葉作業所へ見学へ行き、作業風景を見せていただくと、ハンガーを組み立てたり、靴べらのやすりかけなどの内職をしていた。普段何気なく買っている日常雑貨はこういう方々の内職に支えられているのだと知ることができた。

4. 謝辞

お忙しい中、講義をしてくださり、それだけでなく粉河の作業所まで車で連れて行ってくださった岩出保健所の皆様、今回の研修の用意をしてくださった和歌山県立医科大学地域医療支援センターの方々に、この場をお借りしてお礼申し上げます。

和歌山県立医科大学医学部地域医療科 1 年生 田中 利佳

1. 研修施設とその地域の概要

岩出市は、和歌山県の北部に位置しており、紀の川市、大阪府に隣接する市で、県内では数少ない人口増加都市である。また、県内では珍しく若年層の比率も高い。小売店・飲食店・開業医などが立ち並び、商業地としては紀北有数である。市の特徴として、県内の他の地域とは違い、大阪府内から転入し岩出市内に在住しながらも勤務先の大阪府への自家用車での通勤者が多く、大阪府のベッドタウンとなっていることがある。

岩出保健所は、岩出市高塚にあり、管轄区域は岩出市と紀の川市である。総務健康安全課、保健福祉課、衛生環境課の 3 つの部署があり、総勢 36 人の職員が従事する。

2. 研修内容

午前中は、感染症への対策事業についてや、精神保健福祉事業についての保健所の取り組みについてのお話を聞いた後、実際に精神の作業所の見学をした。午後は、健康福祉部、保健所の組織の説明を受けた後、保健所の三つの柱である保健所の総務健康安全課、保健福祉課、衛生環境課の業務についての講義を聞いた。また、外部の保健所や病院から先生方がいらっしゃる結核審査会に参加した。

3. 考察

今回の研修で、保健所という場が、職員として医師、薬剤師、獣医師、保健師、診療放射線技師、臨床検査技師、衛生公害技師、管理栄養士、また手話通訳、環境監視員などからその他保健所の業務を行うために必要な様々な方が関わって、地域の人々が安全に、健康に暮らせるように非常に多岐にわたる角度からのサポートをしている組織だということを知った。

身近に、保健所の存在によって成り立っている物事は多くある。薬事、水道水の安全・安定供給、食感染症への対応、食料品の衛生の監視、動物の愛護、終活、廃棄物処理、その他私たちが生活上で必要不可欠な数え切れない程の問題への対応が、保健所によって行われている。

研修の中で説明を受けた大規模食中毒対応のシミュレーションでは、限られた人員でどう地

域の人々を守り、混乱する周囲やマスコミに対応するかまでが緊迫感を持って再現されており、地域に根付き、人々に直接的に関わる保健所の業務はそれだけ迅速な対応が必要とされることを理解した。また、精神の作業所の見学の際に働かされていた、年齢も気持ちのあり方も多様な方々が私たちを受け入れてくれたことや、職員の方の温かく大きな心を作る場の和やかな雰囲気はとても印象的だった。薬物乱用防止の啓発、取り締まり指導については、対人に関して少しの違和感を気づきに変えて活かすことや、細かい対応までの行き届いた配慮がなされていることが分かった。保健所全体で、統率、協力、他職種での連携、人々のために動くという献身的な気持ちが大切にされていると感じた。

4. 謝辞

今後医師として地域医療に関わっていく上で、今回の研修で、様々な職に就かれている方々からそれぞれの取り組みや問題に対する考えを詳しく伺ったことは、大変貴重な経験となると思っています。単なる机上の把握だけでなく、実際に現状に触れることがいかに大切かということを実感いたしました。

お忙しい中実習を受け入れてくださった雑賀所長をはじめ、私たちのために貴重なお時間を割いてくださった保健所職員の方々、筍憩会の皆様、地域の方々、地域医療支援センターの先生方に心より感謝申し上げます。得た事を活かし、地域に貢献できる医師になりたいと思います。ありがとうございました。

2 和歌山市保健所



位 置 和歌山県和歌山市吹上 5 - 2 - 15

和歌山県立医科大学医学部地域医療科 2 年生 泉 裕太

1. 研修施設とその地域の概要

和歌山市は、人口はおよそ 36 万人であり、和歌山県北部に位置する 208.84 平方キロメートルの街である。和歌山県の県庁所在地として様々な機能を担っている。和歌山城をはじめとする歴史的建造物も残されており、名勝和歌の浦に始まる数々の大自然を魅力とし、観光を展開している。和歌山市保健所の主な業務内容としては、まずは、病気の予防と健康増進に携わっている。地域住民における、母子の健康保全、生活習慣病の予防推進、難病等への医療費扶助と相談、感染症対策、結核・エイズ・性感染症の予防推進、精神保健福祉や障害福祉保健に関わっており、多岐にわたる。食品衛生や動物保健、環境衛生といった暮らしの衛生面や、医療施設や薬品販売の調査や監視指導なども行なっており、市の保健衛生の仕事全般に関わっていると言える。

2. 研修内容

8時30分～9時00分 オリエンテーション

施設の概要などについての説明を受けた。和歌山市保健所は、総務企画課、地域保健課、生活保健課、保健対策課から成っている。保健所の業務についても説明を受けた。

9時00分～10時30分 健康危機管理班

感染症サーベイや、災害対策を行っている。特定の感染症について、統計をとってデータを作るなどして絶えず感染症に目を向けていた。また、災害が起こった時には状況をマッピングなどで把握し、DMAT等の派遣の計画や、その後の対策などが決定されているという話を伺った。

10時30分～11時00分 地域保健課

併設の夜間・休日診療センターに案内していただき、施設の説明や業務内容について説明を受けた。一次救急を受け付け、インフルエンザが流行する時期などはかなりの数の人が待つようになるという。また内科と小児科については休日診療も行っている。

11時00分～12時00分 結核についての説明

午後に結核審査会があるので、それに合わせて結核がどのような病気であるか、また、現在の和歌山市の結核患者の状況などについて説明を受けた。

12時50分～14時00分 生活保健課

食品衛生管理として、地域のスーパーなどに出向いて調査を行うところを見学した。肉類などは指導などの対象になりやすいなどの説明を受けた。その後、動物保護施設の見学にも行った。犬や猫などが保護されており、現在はほとんど使うことはないが処分に使う機械も見せていただいた。

14時00分～16時00分 結核審査会、予防可能検討会

数人の医師や法律関係者などが集まって、県内で結核治療を受ける患者の情報を交流、検討していた。また、結核が発覚した場合に、感染が広がっていないかなどについて調査する計画などが検討されていた。

3. 考察

保健所の業務が多岐にわたって行われていることがわかった。当日は検診や予防接種といった特別な日程はなかったものの、多くの課、班に分かれて市民の健康の保持増進に取り組んで

いた。結核審査会では、一人一人について詳しい情報がやりとりされていて、結核が病気としていかに重んじられていて、その対応にも力が入っているかということを感じた。その後の予防可能検討会でも、結核が発覚したときのことから、さらに遡って感染のタイミングについて検討したり、家族や近辺の人に感染が広がっていないかの調査を検討したりと、その抜かりなさが見られた。そのほかにも市保健所の業務を詳しく知ることができてよかった。和歌山市以外の市町村の保健所とは管轄が違うので、業務内容にどのような差があるのかについても調べてみたいと思う。

4. 謝辞

永井保健所長をはじめ、職員の方々には私たち学生のために時間を割いて業務について教えていただき、お世話になりました。今後、医療に携わる上での糧にしたいと思います。本当にありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 2 年生 高橋 翠

1. 研修施設とその地域の概要

和歌山市保健所は和歌山市吹上に立地する、和歌山市夜間・休日応急診療センターと併設された施設である。和歌山市保健所には総務企画課、生活保健課、保健対策課、地域保健課がある。総務企画課には庶務班、医事薬事班、健康危機管理班があり、病院等の開設申請の受理や感染症対策を行っている。生活保健課には食品保健班、動物保健班、環境保健班があり、食中毒が発生した際の対応や動物の保護などを主に担っている。保健対策課には感染予防対策班、こころの健康対策班、難病対策班があり、エイズや結核対策、自殺予防、難病者の生活支援などを主な業務としている。地域保健課には健康総務班と健康づくり班があり、子育て支援や虐待防止を目的としている。

2. 研修内容

本研修では健康危機管理について、結核について、生活保健課の業務について説明をいただいたほか、応急診療センターを案内していただき、地域保健課での会議と結核審査会に参加した。健康危機管理班では感染症予防に関する対策と災害時の対応についてお話いただいた。医療機関で診察された感染症は保健所に報告され保健所から国にデータを送ることで、全国区での感染症の把握が可能になっているようだ。また、感染症が管轄地域で発生した場合には保健所が検査、対処等を行う。また、災害が発生した際には、DHEAT を派遣し、中央保健所で分析や

対応策の考案、決定等を行うとのことだった。

和歌山市夜間・休日応急診療センターでは小児救急がメインで行われており、その他にも歯科診療等も行っている。生活保健課ではスーパーマーケットでの食品の検査について実際にスーパーマーケットに行き説明していただいた。また、動物を収容している施設にも行き、動物愛護について説明していただいた。結核審査会では県内の結核患者の今後の治療について様々な職種の方々が集まって審査しているところを見学した。

3. 考察

本研修では、保健所が行っている様々な事業について学んだ。私が思っていたよりもはるかに多くのことを保健所が担っており、地域医療における保健所の大切さを感じる研修だった。今後医師となり、地域医療に関わっていく中で、保健所に関わることも多いと思うが、今回の研修で学んだことを忘れずに、役立てていきたいと思う。また、保健所では様々な職種の方々が、お互いに協力しながら働いていらっしゃるのが印象的だった。

4. 謝辞

今回の研修では永井所長をはじめ、和歌山市保健所の皆様にはお忙しい中、お時間を割いていただき、貴重な経験をすることができました。今回の研修で地域の保健事業について多くのことを学ぶことが出来ました。地域医療卒の生徒として、地域に貢献できる医師になれるようにより一層勉学に励んでいきたいと思っております。ありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療卒 1 年生 塩塚 諒

1. 研修地域の概要

和歌山市保健所は和歌山市を管轄としている。和歌山市は紀の川の河口に位置し、中心市街地は左岸に形成されている都市で、面積がおよそ 208.84 平方キロメートル、総人口が 2018 年 4 月 1 日時点で 358,473 人である。隣接する自治体には海南市、紀の川市、岩出市、大阪府阪南市、泉南郡岬町があり、気候は天気や湿度が安定していて雨量が比較的少ない瀬戸内海式気候である。

2. 研修内容

8:30 ~ 9:00 オリエンテーション

和歌山市保健所が総務企画課、生活保健課、保健対策課、地域保健課の 4 つの課からなり、総務企画課は庶務班、医事薬理班、健康危機管理班の 3 つから、生活保健課は食品保健班、

環境保健班、動物保健班の3つから、保健対策課は難病対策班、こころの健康対策班、感染予防対策班の3つから、地域保健課は健康総務班、健康づくり班、中保健センターの3つからなることを学んだ。

9：00～10：30 健康危機管理班見学

災害時の保健所の働きを学び、和歌山市夜間・休日応急診療センターの内部を見学することができた。

10：30～11：00 地域保健課見学

11：00～12：00 結核説明

結核の症状や原因、事例等を学ぶことができた。

13：00～14：00 生活保健課見学

スーパーで実際に食品を見ながら食品保健について学び、動物を保護している施設で動物保健について学ぶことができた。

14：00～15：00 結核審査会见学

15：00～16：00 予防可能検討会见学

3. 考察

私は幼い頃、夜間に熱を出し和歌山市夜間・休日応急診療センターで診察を受けることがよくあったのだが、この和歌山市夜間・休日応急診療センターが和歌山市保健所の一部であると知り、非常に驚いた。私は今まで保健所という施設がどのような施設なのかということを全く知らなかったが、今回の和歌山市保健所の見学を経て、保健所の担う役割がいかに多く、またどれほど地域に根差しているかを学ぶことができた。この経験は将来必ず役に立つと思う。来年からは保健所の働きや役割を理解したうえで研修に臨み、地域の特性などを学ぼうと思った。

4. 謝辞

最後になりましたが、今回の夏季合同研修を行うにあたり有意義な研修の場を用意して下さった先生方、充実した計画を企画して下さった和歌山市保健所の先生、スタッフの皆様にご心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 1 年生 百名 孝太

1. 研修を行った保健所が管轄する地域の概要

和歌山市は、和歌山県北部に位置し、県の面積の約 4% ほどだが、県人口の約 40%（およそ 36 万人）が暮らしており、中核市に指定されている。隣接する自治体は、海南市、紀の川市、岩出市、大阪府阪南市、泉南郡岬町、兵庫県洲本市（紀淡海峡を挟んで）である。平成 22 年国勢調査（速報値）より前回調査からの人口増減をみると、1.65% 減の 369,400 人であり、増減率は県内 30 市町村中 4 位である。

2. 当日の実習内容

8:30 ~ 9:00 オリエンテーション（施設案内）

和歌山市保健所は、総務企画課、生活保険課、保健対策課、地域保健課からなり、それぞれの課が、いくつかの班に分けられているという話を伺った。

9:00 ~ 10:00 健康危機管理

感染症を未然に防ぎ、被害を最小限に抑える為に、様々な取り組みがなされている。例えば、蚊を媒介して感染するデング熱が和歌山市で起こらないように、感染源となる外国人の血液を蚊が吸っていないかを調査する為、外国人が多く訪れる和歌山城で蚊を採取していると教わった。

10:00 ~ 11:00 地域保健課

がん検診の受診率を向上させるために、会議が行われるということで、会議を見学した。

11:00 ~ 12:00 結核説明

結核について、現在と過去の感染者数、新規感染者数の資料を見た。結核と言えば、過去の病のように思われがちだが、現在も少数ながら一定の新規感染者がいるということを知った。

13:00 ~ 14:00 生活保護課

食品管理と動物保護について、実際にスーパーマーケットと動物管理を行っている施設を訪ね、現場を見学した。食品管理では、商品のラベルにきちんと安全面について記載されているか、動物保護では、捨てられた犬や猫の新しい飼い主を探していたり、場合によっては、やむなく殺処分するということを教わった。

14:00 ~ 15:00 結核審査会

結核と診断された患者、または結核と診断され治療を受けている患者について、治療方針や、処方している薬が適切であるかなどのカンファレンスを見学することができた。CT 画像や、レントゲン写真をもとに医師だけでなく、人権や法学に精通されている方も参加して

いた。

15：00～16：00 予防可能検討会

結核と新しく診断された患者について、その患者と同じ病室の人に感染していないか、検査する必要があることや、患者と保健所の方は接触済みなのか、といった話し合いがなされていた。

16：00～16：30 総括

永井保健所長と、実習についての感想や、現在の保健所が抱える問題点、これから先、保健所に関してどういったことが起こると予想されているのかについて話をした。

3. 考察

今回の研修で、保健所で行われていることが、実に多岐にわたる、幅広いものだと感じた。自分の中では、保健所とは医療に携わる何か、というあまりに漠然とした印象しか無かったのだが、実際には食品の安全管理や動物の保護といったものもあり、その幅広さに驚かされた。今回の研修では、様々な分野の方々から話を聞くことができ、いい刺激になった。

4. 謝辞

最後になりましたが、今回の研修にあたり私たちを支えていただいた永井保健所長はじめ、和歌山市保健所の方々には、感謝しかありません。これまで抱いていた保健所に対する漠然としたイメージが、今回の研修ではっきりしたものになりました。本当にありがとうございました。

3 湯浅保健所



位 置 和歌山県有田郡湯浅町湯浅 2355 - 1

和歌山県立医科大学地域医療枠2年生 小西 朋樹

1. 研修施設のその地域の概要

■湯浅保健所の概要

湯浅保健所には総務健康安全課、保健福祉課、衛生環境課の3つの課があり、それぞれが連携しながら業務を行っている。総務健康安全課では、生活保護や生活困窮者に対する支援に加え、感染症や健康危機管理、人口動態調査や災害救助などを管轄している。また、保健福祉課では、障害者支援や福祉関係、難病や健康作りに重点を当てた支援を行っている。さらに衛生環境課では食品衛生や環境保護、動物愛護などの環境や公衆衛生に関わることを行っている。そこに住んでいる地域住民にしっかりと地域保健の思想を広めていくことが保健所の重要な使命の1つになる。

■湯浅保健所が属する有田

有田保健医療圏には、有田市、広川町、湯浅町、有田川町の1市3町が属しており、面積

は 474.85km²、人口は 74,255 人である（2015 年現在）。また高齢化率は 31.9%となっており、和歌山県内の高齢化率 27.3%よりも高くなっている。圏内には有田市立病院をはじめとして 6 つの病院があり、健康作り、災害医療、救急医療、精神医療などの体制の強化に努めている。

2. 実習内容 日時 7月26日(木) 9:00 から 16:00

午前(9:00 から 12:00)	保健所実習概要説明 保健所で行っていること 保健所の役割とは 家庭訪問事例概要説明 家庭訪問（有田市）
午後（13:00 から 16:00）	公衆衛生とは 難病経過措置について
14:00	難病対策地域協議会
16:00	まとめ

3. 考察

昨年見学した御坊保健所に引き続き、今年は湯浅保健所を見学した。昨年、保健所でどのようなことを行っているのかを学んだが、やはり、そこに暮らしている住民に健康についての意識をしっかりと持ってもらうこと、その意識を広めていくことが重要であるということが分かった。特に湯浅保健所においては、結核などの感染症に対する支援がしっかりと行われており、退院した後も保健所から家庭訪問を行うことで経過観察を実施していた。服薬が終了して 2 年間は、保健所で管理検診を半年ごとに行っているという。なかなか病気が治ると検診には行かなくなるが、感染症においては完全に菌を無くしておかないと再発する危険性がある。そのため、定期検診を保健所でするのは住民にとってもありがたいことだろう。

後半では難病対策地域協議会を見学した。いわゆる難病にかかった患者さんをどのように支援していくかというもので、医師や保健所だけでなく、ハローワークや就労支援センターなど、仕事の面でもしっかりとバックアップがされていた。難病は治療が長期間に及ぶため、それまで務めていた仕事を辞めざるを得ない場合が多い。そのため、治療をしながらも続けられる仕事を探すことは重要なことである。病院や保健所と就労支援がしっかりと連携し、患者の情報を共有することによって、その患者にあった仕事を進めることができると感じた。

保健所においては、地域の住民の健康を第一に考え、健康についての意識をしっかりと広めていくことが大きな役割である。病気にならずに健康に過ごせることに越したことはない。病気にならないように、日頃の生活をきちんとしたり、早めに検診を受けるなど、私たちが意識的に行わなければならないことが分かった。

4. 謝辞

最後になりましたが、今回私たちのために貴重な時間を割いてくださった湯浅保健所のスタッフの皆様、この研修を計画してくださった地域医療支援センターの先生方に、この場を借りてお礼申し上げます。短い時間でしたが、非常に実のある研修となりました。ありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療科1年生 板谷 耀平

1. 研修施設とその地域の概要

湯浅保健所は和歌山県有田振興局健康福祉部のことであり、総務健康安全課、保健福祉課、衛生環境課の3つの部署に分かれており、さらに各課の中でグループ分けがされ事務内容が分担されている。当保健所の管轄地域は有田市、有田川町、湯浅町、広川町である。和歌山県福祉保健部福祉保健政策局長寿社会課によると平成29年度の高齢化率は順に31.7, 31.0, 33.1, 31.3%であり、この年の和歌山県の高齢化率30.9%を上回っている。この地域には有田市立病院、済生会有田病院、和歌山県立こころの医療センターが公的病院としてある。また高齢化が進行する中、有田医師会は平成28年4月より「有田医師会 在宅医療サポートセンター」を開設し、地域住民が皆安心して生活できるような支援を行っている。

2. 研修内容

日時：平成30年7月26日（木）

9：00～9：15 研修概要説明

松本政信保健所長より湯浅保健所の地域の中での立ち位置や今回の研修内容についての説明を受けた。

9：15～12：00 家庭訪問事例概要説明，家庭訪問（有田市）

結核患者支援フローシートを見ながら担当の方から医師に結核と判断されてから治療が終了し、その後2年間管理検診を受け終わるまでの大まかな流れの説明を伺った。その際、医療機関と保健所それぞれが担っている役割についての説明を受けた。その後、肺結核に感染し研

修日の約半年前に治療が終了した方の自宅を訪問し、体調に変化はないかなどのお話を伺った。

13：00～14：00 所長による講義

保健所の使命や公衆衛生活動とは何か、またハイリスクアプローチとポピュレーションアプローチの関係や血圧と脳卒中の関係について学習した。

14：00～16：00 難病対策地域協議会に参加

有田市医師会、有田医師会の医師を始め地域病院の関係者の方、事業所の方などを招いて行われた難病対策地域協議会の話し合いに同席した。ここでは事業場における治療と職業生活の両立支援のためのガイドラインについての話し合いが行われた。

16：00～16：10 まとめ

所長にこれからの医療のあり方などを伺った。

3. 考察

保健所とはどのような役割を果たしているのか今まで全く知らなかったが、医療機関と地域共同体をつなぐ役割を担っていることを知った。同時に感染症にかかった後の対応だけではなく、地域社会において感染症の予防に努めること、そして福祉や衛生に関することなど活動が多岐にわたっていることを知る有意義な機会となった。高齢化が進行する中、どのような医療を提供するのかだけではなく、公衆衛生について学ぶ重要性を今回の研修で学ぶことができた。また、難病対策地域協議会の話し合いより疾病を抱える方が治療と仕事を両立することは困難であると考えられるが、このような方を支える取り組みがなされることで平等に働く機会が提供されるのだと感じた。

4. 謝辞

今回の研修で松本所長を始め保健所職員の方から様々なことを学ぶことができました。これから専門的な勉強をするにあたり今回学んだことを胸にとどめ、将来に活かしていきたいと考えています。お忙しい中、このような貴重な時間を与えてくださりありがとうございました。

参考

和歌山県ホームページ <https://www.pref.wakayama.lg.jp>

有田医師会 在宅医療サポートセンターホームページ <https://aridashi-support.com>

事業場における治療と職業生活の両立支援のためのガイドライン 厚生労働省

和歌山県立医科大学医学部地域医療科 1 年生 井上 涼介

1. 研修施設とその地域の概要

今回の研修で私は湯浅保健所を見学した。湯浅保健所の管轄区域は有田市、有田川町、広川町、湯浅町であり、いずれの市町村も人口減少と高齢化が進行しているのが特徴である。湯浅保健所は現在約 7 万人の地域住民の健康・衛生を支えており、具体的な業務としては、地域住民への健康に関する知識の啓発やインフラ整備、組織的な感染症の予防、障がいや難病を抱える人やその家族、また母子に対する支援などがある。

2. 研修内容

松本政信所長から研修の概要の説明を受けた後、梅津保健師に付き添い、服薬の終了した結核患者の方の家庭訪問を見学した。患者の方は何度も梅津さんのことを信頼していると口にしてきた。その理由として病気で苦しんでいたときに手厚い支援をしてもらったことを挙げていたことから、患者さんが苦しいときこそ寄り添って支援することが信頼関係を築く上で大切になると分かった。

家庭訪問終了後、保健所に戻り松本所長から保健所の使命や活動について、また公衆衛生がどのように発展してきたかを教わった。その後、難病対策地域協議会を見学した。

医師、看護師、保健師、社会福祉士など様々な職種の方がこの会に参加し、難病患者に対する就労支援や、治療と仕事の両立支援がどのように行われているか、またどのように改善していくべきかについて話し合っていた。

3. 考察

結核患者の方の家庭訪問を見学した際に、患者さんが保健師の方を信頼し自分の症状や不安、家族のことなどを話している様子を見て保健師の方と積極的に関わる必要性を感じた。また難病対策地域協議会においては、それぞれの職種で意見を出し合うことで問題の発見、及びその問題に対する解決策の考案がスムーズに行われているように見えた。今回の研修を通して医療従事者間での情報の共有や連携の大切さを改めて実感することができた。

4. 謝辞

今回、湯浅保健所で普段見ることの出来ない保健所の仕事の一部を見学し、地域に住む患者さんの生の声を聞けたこと、また難病対策地域協議会で医療従事者間での話し合いを直に見れたことはとても貴重な経験となりました。この研修で得た経験は必ず今後活かしていけると思います。湯浅保健所の松本所長、梅津様、このような学習の場をいただきありがとうございました。

4 御坊保健所



位 置 和歌山県御坊市湯川町財部 859 - 2

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 2年生 荒木 彩加

1. 研修施設とその地域の概要

御坊保健所が位置する御坊市は、和歌山県のほぼ中央に位置する、和歌山県紀中・日高地域の中核都市である。平成29年1月1日現在、総人口が64,495人、65歳以上人口が20,506人と、高齢人口比率は29.7%である。和歌山県平均の高齢人口比率は30.9%であり、それよりは下回っているものの、4人に1人以上が高齢者という状況であり、20年後には県全体で高齢人口比率は40%に達すると推計されている。そこで、御坊市は地域の人々が元気にいきいきと生活できるように健康づくりを地域全体で推進することを目指し、健康づくりの現状と課題を明確にすることで、『健康日高21』において、6つの分野（①栄養・食生活、②身体活動・運動、③休養・こころの健康、④酒、⑤たばこ、⑥歯・口の健康）で目標値を決定している。

2. 研修内容

午前はオリエンテーションで、保健所の保健福祉課、衛生環境課、総務健康安全課というそれぞれの課からお話を伺った。保健所の業務は大きく分けて、①法令に基づく定型的業務、②健康危機への対応、③地域連携業務であると教えていただき、想像以上の業務の種類の高さに驚いた。単に住民の方々の健康をサポートするというだけでなく、広域的で専門的なことを実践されていると感じた。

午後は美浜町の住民の方々と一緒に「いきいき百歳体操」を行った。和田西畜産センターにて週1回活動されているという。皆さんと話していると、その施設の付近に住んでいらっしゃる方が多く、家からすぐ来られて集まりやすいのが良いところだとおっしゃっていた。集まって体操をすることで、生活するために必要な筋肉を鍛え、維持するだけでなく、住民の方々のコミュニケーションの場にもなっており、それも目的の1つなのだった。週1回の活動で、しばらく来ていない人が居たら皆さん心配するだろうし、一人暮らしのお年寄りが増えている中で、これは画期的な取り組みであると感じた。

3. 考察

御坊市に限ったことではないが、近年の著しい少子・高齢社会、情報化社会や流通経済の急速な進展の一方、複雑多様化した社会情勢の中で、不規則な生活リズムや偏った食生活、運動不足などに起因する糖尿病やがん、心疾患などの生活習慣病や様々な慢性疾患、ストレスの増大などによる精神疾患等が著しく増加している。また、結核の再燃やエイズ・HIV感染症の感染拡大、新型インフルエンザなどの全世界的な対策を求められる感染症の問題など健康を取り巻く課題は極めて複雑多様化してきている。さらに、疾患や障害、高齢化により介護や支援を必要とする人が地域社会の中で生活することを基本とし、必要な支援を提供する体制づくりが、介護保険制度や障害者の自立支援制度、在宅医療の医療連携体制構築により進められている。近く発生が予想されている東海・東南海・南海地震やそれに伴う津波など、市民の生命、健康を脅かす災害や突発的な事態の発生に的確に対応するためにも健康危機管理対策の整備や災害医療体制の見直しを進めており、保健所の業務はそういった危機に対応するためにも必要不可欠なものだと考えた。

4. 謝辞

この度はお忙しい中、私たちのために時間を割いていただき、研修をさせてくださりましてありがとうございました。保健所を訪問したのは初めてだったので、保健所の業務、どんな取り組みをされているのか興味深く学ぶことができました。将来医療従事者になる者として、今回地域での住民活動に共に参加し、住民の皆さんと触れ合うことで、地域で働く意志を強めら

れたことは大きな収穫であったと思います。ご指導をいただいた皆様、住民の皆様、本当にありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠2年生 松本 和樹

1. 研修施設とその地域の概要

・御坊保健所の概要

御坊保健所には総務健康安全課、保健福祉課、衛生環境課という3つの課がある。総務健康福祉課では、業務の総合調整や人事管理、地域医療体制の整備や医事、保健統計、結核感染症対策などの健康安全に関する仕事を行っていた。保健福祉課では、主に障害者や精神保健福祉・高齢者に対する福祉と母子や児童の福祉、健康作りといった健康子供家庭に関する福祉の2つがあった。ここでは生活習慣病を予防するための「健康・日高21」などの取り組みが行われており、歯科検診、喫煙予防などの地道な取り組みが行われていた。衛生環境課では、食の安全や動物愛護、廃棄物や公害対策、環境保護といった住みやすい街を作っていくための取り組みが多く行われていた。3つの課がそれぞれの役割を果たすことで、圏内に住む住民の暮らしをより良くしていこうという意思が感じられた。

・御坊保健所が属する御坊保健医療圏の概要

御坊保健医療圏には、御坊市、由良町、日高町、美浜町、日高川町、印南町の1市5町が属しており、面積は579.16km²、総人口は67,243人である。(平成22年現在) 高齢化率は28.8%となっており、和歌山県全体の高齢化率27.3%よりも高くなっている。また主要疾患(悪性新生物、心疾患、肺炎、脳血管疾患)の死亡率も全て和歌山県全体よりも高い。圏内には北出病院、整形外科北裏病院、国保日高総合病院、和歌山病院の4つの病院があり、健康作り、災害医療、救急医療、精神医療などの体制の強化に努めている。

2. 研修内容

日時：7月26日(木) 9時半～15時

9時半～10時 御坊保健所の事業についての説明

10時～11時 保健福祉課についての説明

11時～11時半 衛生環境課についての説明

11時半～12時 総務健康安全課についての説明

12時～13時 昼休憩

13時～14時半 美浜町でいきいき百歳体操、がんばれ百百ちゃんクラブ

3. 考察

私は今回、御坊保健所で研修を行った。去年は、同じように、地域医療卒の研修として岩出保健所に行ったが、その時には保健所での乳幼児、児童の問診の様子などを見学した。御坊保健所でも同じことをしていると聞いたのでどこの保健所もある程度は同じ事業をしているのだと思った。一方で、保健所ごとで、力を入れて進めている事業や、その地域ならではの事業などもあるのだとも感じた。御坊保健所の場合は、特に力を入れている事業として、「健康・日高21」という事業があった。これは、和歌山県では、全国でも有数の高齢化率が問題となっており、長生きすることは良いことではあるが、年をとればとるほど、様々な疾患にかかりやすくなるリスクは大きくなるため、私たちは病気を未然に予防するために早期の検診を受ける必要があるが、検診に行く時間がなかったり、面倒くさいなどといった理由で、検診に行かない人が年々増えているので、そういった方々に検査を受けてもらおうとする事業である。和歌山県では高齢化が進んでいるため、こういった事業は他の地域でも進めていくべきだと思う。

4. 謝辞

お忙しい中、私たちの研修を受け入れてくださった御坊保健所の皆さま、御坊地域の方々、今回の保健所研修を企画してくださった和歌山県立医科大学地域医療支援センターの方々にごこの場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療卒1年生 行岡 翼

1. ■御坊保健所が管轄する地域の概要

御坊保健所は和歌山県のほぼ中央にある御坊市にあり、御坊市、由良町、日高町、美浜町、日高川町、印南町の1市5町を管轄している。圏域の面積は579.02km²（平成28年）、総人口は62,315人（平成29年）である。高齢化率は圏内の各市町村とも、全国平均の26.6%を上回っており、少しずつ増加する傾向にあるが、人口増減率は-5.41%（2010～2015）と、人口は減少傾向にある。

■御坊保健所の概要

御坊保健所は、「総務健康安全課」、「保健福祉課」、「衛生環境課」の3つの課をもつ。3つの課がそれぞれの役割を果たしながら、地域の住民の暮らしを支えている。

総務健康安全課には、予算決算の総括、人事管理や生活保護などを行う「総務保護グループ」と、地域医療体制の整備、医事、統計や、結核・感染症対策などを行う「健康安全グループ」がある。

保健福祉課には、障害者や、高齢者などの福祉対策を行う「高齢・障害保健福祉グループ」と、母子・児童福祉、母子保険や、難病患者保健福祉対策、健康日高 21 などの取り組みを行う健康づくりを行う「健康・子ども家庭グループ」がある。

衛生環境課には、食の安全や、公共の場の衛生管理指導、廃棄物や公害の対策などを行う「衛生環境グループ」がある。

2. 研修内容

午前：オリエンテーション（保健所の概要、役割のお話）

午後：いきいき百歳体操、サークルの皆さんへのインタビュー

3. 考察

これまで、保健所という場所に行ったこともなく、保健所のイメージとしてあったのは、重度の感染症患者を診るといふ、とても拙いものだった。しかし今回、保健所研修という形で機会を得て、保健所が担う役割を学ぶことによって、保健所が住民の生活を支え、住みやすい街づくりにいかに貢献しているかということがわかった。また、特に医療や福祉の面で、検診や健康日高 21 を通じた、保健所と地域住民と医療機関との連携の重要性を改めて感じた。

また、美浜町の地域包括支援センターの取り組みのひとつの「いきいき百歳体操」を地域住民の方と一緒にできたことはとても意義深いものだった。高齢化が進むなかで、健康寿命を延ばそうと行政が働きかけることで地域住民が率先して、体操を毎週暑い中取り組む姿勢に感銘を受けた。

将来、地域医療に従事する医師になるために、その場所、住民、環境の特性を認識した上で、連携を大切にしながら医療と向き合う姿勢が大切だと思った。

4. 謝辞

最後に、今回の研修のためにお忙しい中貴重な時間を割いてくださった、御坊保健所の皆様や、美浜町の地域包括支援センターの皆様、今回の保健所研修を計画してくださった和歌山県立医科大学地域医療支援センターの方々、本当にありがとうございました。この経験を生かして、より一層勉学に励み、地域医療に貢献できる医師になりたいと思います。

5 田辺保健所



位 置 和歌山県田辺市朝日ヶ丘 23 - 1

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 2 年生 野久保 翔太

1. 研修施設とその地域の概要

田辺市は和歌山県南部の中心都市である。近畿の市の中では面積は最大である。気候は黒潮の影響があり、比較的温暖であるが、内陸は山が迫り、山地的な気候の影響がある。一方、市の北部は紀伊山地に面する。熊野本宮大社や、熊野参詣道、熊野九十九王子社跡などは、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に含まれる。海岸線は入り組んで田辺湾を形成する。湾内には神島など小さな島があり、亜熱帯性の生物が記録されている。湾の北の端には天神崎がある。人口は和歌山県内では和歌山市に次いで第 2 位である。田辺保健所は西牟婁振興局の健康福祉部として存在し、総務健康安全課、保健福祉課、衛生環境課の 3 つの課がある。

2. 研修内容

午前中は施設内を見学した。レントゲン室や診察室などもあり、ウイルスの拡散を防ぐための機械のついてある車椅子などもあった。また、かつて水質の検査や、地域の人たち向けに料理教室を行っていた部屋などもあった。器具等も年季の入ったものもあり、全ての設備を使っているわけではないようだったが、県に受け渡すまでの検査や作業を行っていた。その後、田辺市民総合センターで行われた、和田所長が講師の「国民の健康状況と『健康日本 21』」に参加させてもらった。

午後は食品工場での衛生管理、生活保護世帯の訪問、保健師の家庭訪問のいずれか 1 つを分かれて見学した。保健師の家庭訪問を見学させてもらった。難病の方の家庭訪問だった。

3. 考察

かつて行っていた業務の痕跡もあり、幅広い範囲のことを担っていたとわかった。また、講演を行ったりと、自分の考えていたことよりも多くの仕事があると知った。また、難病の方の家庭訪問では、国からの補助金の更新手続きを行うのが初めてでわかりづらいため、保健師さんが訪問した。確かに複雑で自分一人で行うのは心細く、このような知識のある保健師さんに助言してもらえるのはありがたいと思う。難病のための補助金がもらえないとなると患者さんやその家族にとっては大きな損失になるので、そのようなことを起こさないようにする重要な業務だと感じた。

4. 謝辞

最後に、今回の保健所研修のためにお忙しい中貴重なお時間を割いてくださった御坊保健所の職員の皆様、そしてこの研修を計画してくださった地域医療支援センターの先生方にお礼申し上げます。貴重な経験をさせてくださり、ありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 2 年生 山本 宗汰

1. 研修施設とその地域の概要

田辺保健所は、田辺市、日高郡（みなべ町）、西牟婁郡（白浜町、上富田町、すさみ町）の 1 市 4 町を管轄しており、和歌山県のほぼ中央に位置している。面積は 1,580km² で、和歌山県全体の約 3 分の 1 を占めている。黒潮の影響から、年間を通じて温暖で比較的多雨である。

山間部は高野龍神スカイラインにより高野町と田辺市龍神村が結ばれている。また近畿自動車道紀勢線の田辺～すさみ区間が平成 27 年に開通し、管内の交通アクセスが容易になっている。

田辺市には熊野参詣道、熊野九十九王子社跡など、「紀伊山地の霊場と参詣道」に含まれる文化遺産がある。

2. 研修内容

まず、保健所施設を見学した。現在は使われていないが、料理教室を行うための調理場などがあった。

続いて、公用車で田辺保健所から田辺市民総合センターに移動し、田辺市食生活改善推進員養成講座に参加した。テーマは『国民の健康状況と「健康日本 21」』だった。都道府県による気候の違いなどが、様々ながんの発症数に影響を与えている可能性があることを知ることができた。

午後からは、総務健康安全課、衛生環境課、保健福祉課の業務説明を受けた後、衛生環境課の方に同伴して食品工場での衛生管理調査の見学をした。食品の品質をデータで管理しているということを学ぶことができた。

最後に、他の研修生と意見交換を行った。

3. 考察

田辺市は私の地元であるが、保健所に行く機会は記憶にある限りあまりなく、また何をしているのかもよく知らなかった。今回、田辺保健所での研修に参加し、田辺保健所が広い地域の福祉を担っていることが分かった。また、実際に食品工場の衛生調査に参加したことで、業務の様子を具体的に知ることができた。

4. 謝辞

最後になりましたが、地域医療実習として充実した実習を企画してくださった先生方、指導していただいた田辺保健所の先生、スタッフの皆様、実習に協力していただいた利用者の皆様に心から感謝いたします。ありがとうございました。

- ・参考文献
- ・田辺市ホームページ
- ・平成 29年度田辺市事業概要

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 1 年生 高橋 文太

1. 田辺保健所が管轄する地域の概要と施設紹介

田辺保健所の管内は、和歌山県のほぼ中央に位置し、田辺市、日高郡（みなべ町）、西牟婁郡（白浜町、上富田町、すさみ町）の 1 市 4 町である。面積は 1,580km²（平成 28 年）で和歌山県全体の約 33% を占めている。人口は 126,535 人（平成 28 年）で県内の 13.1% を占める。人口の増減率は -1.27% で県内の -1.00% と比べ減少率が大きい。

保健所の役割としては地域住民への食育を通じて健康増進を促し、予防接種の実施、水質、

放射線などの環境調査、ウイルス・感染症対策等、地域住民の暮らしの安全安心を保証している。田辺市の健康福祉業務は田辺市市民総合センターと連携している。

2. 内容

到着後、館内のオリエンテーションを行った。まず、栄養指導室を見学した。ここでは、かつて1人暮らしの人や子持ちの親向けに栄養管理士の方がバランスの取れた料理を作っていたという。師範台という鏡で料理人の手元が見えるようにする工夫の名残も見ることができた。化学検査室では古川の水質調査や、東日本大震災以後は放射線測定も行っている。

隣の細菌検査室では大腸菌等を簡易キットで検査したり、飛沫感染を防ぐ防護スーツの管理を行ったりしていた。検査等の多くは和歌山市の医療機関に委託されていると伺った。レントゲン室では市内に3台しかないアナログ式のレントゲン現像機を拝見でき、貴重な体験となった。また、医療被曝についても伺えた。隣の診察室では感染者とその家族の診察も行っているそうだ。エボラ出血熱など人から人に感染しやすい感染病患者を隔離しながら運ぶ車椅子（アイソレーター）もあり、印象に残った。10時頃から田辺市市民総合センターに向かい、田辺市食生活改善推進員養成講座を受けた。健康日本21の考え方から日本の健康状態を社会的要因の関連で確認し、改めて生活習慣の改善の必要性について考えた。誤った健康情報が蔓延する中、いかに優れた家庭料理の伝統、文化を受け継いでいくかが重要だと学んだ。

午後からは、総務健康安全課、保健福祉課、衛生環境課の3つの科の役割の説明を受けた。その後、総務健康安全課の総務保護グループが担当する生活保護業務を見学させていただいた。みなべ町の4件のお宅を回り、そのうち3軒の住民の様子を窺った。送ってもらう途中、ケースワーカーの方から生活保護業務の抱える問題点、やりがいなど、参考になるお話を聞かせてもらった。

3. 考察

今回の保健所研修を通じて、保健所が地域住民の健康的な暮らしにいかに関与しているかを実感した。特に総務健康安全の分野では、地域医療・救急医療体制を確保したり、医療相談や、医療類似行為の啓発など医療と密接に関係する業務を行っていたり、防疫対策でも、予防接種、検査、健康診断、予防から拡大防止まで医業種との連携が強いと思った。和歌山では車の利用が多く、運動不足になりやすかったり、梅やおかいさんなど伝統的に塩分が多い食生活になりがちで生活習慣病にかかりやすかったりといった風に、普段意識していないが、地域的特性が健康に影響を与える要因があるのを知り、医療は地域的視点で見べきものだと実感した。

4. 謝辞

今回の田辺保健所実習で、案内してくださった和田所長をはじめ、各職員方の皆様お忙しい中私たちの見学をサポートしてくださりありがとうございました。

6 新宮保健所



位 置 和歌山県新宮市緑ヶ丘2丁目4-8

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠2年生 谷地 晃

1. 研修施設とその地域の概要

新宮保健所は新宮市緑ヶ丘にあり、新宮市及び東牟婁郡（那智勝浦町、太地町、古座川町、串本町、北山村）の1市4町1村を管轄している。管轄区域について、人口は64,421人（平成30年4月1日）で県全体の6.9%と人口規模が小さく、高齢化率は39.1%（平成27年）と県全体の30.9%（平成27年）を上回り、2040年の人口が42,818人と推計されるなど、県内において人口減少、少子高齢化が顕著な地域である。県の南部に位置し、総面積は922.43km²であるがほとんどが山間部である。気候は温暖で、降水量が多い。産業としては、漁業、林業、農業と幅広く盛んで、勝浦漁港に水揚げされるマグロや北山村で栽培されるじゃばらなどが有名である。また観光地としても賑わっており、世界遺産・熊野古道は人気が高い。管内の医療体制としては新宮市立医療センター、那智勝浦町立温泉病院、くしもと町立病院を柱とし、病院8か所、医科診療所64か所が地域の保険医療を担っている。

2. 研修内容

日時 7月31日

9:00～10:30 朝礼、オリエンテーション

11:00～12:15 重症心身障害児通所施設「かのん」見学

13:30～14:45 那智勝浦町立温泉病院にて、院内見学、研修医との意見交換

15:00～16:30 土砂災害啓発センター見学

平成30年7月31日、新宮保健所にて研修を行った。まず、職員の朝礼に参加し、続いて形部裕昭所長より、保健所及び地域保健の概要と管内の健康課題、現在進めている取り組みについて説明していただいた。新宮・東牟婁圏域においては先に示した通り人口減少、少子高齢化の問題を抱えており、保健所としては地域の実情やニーズを調べ、地域医療構想（病床再編と機能分化・連携）、在宅医療・介護のネットワークづくりなど地域包括ケアシステムの構築に力を入れている。

この後、温泉病院の敷地内にある重症心身障害児通所施設「かのん」を訪問した。「かのん」は障害児の介護と療育を目的として運営され、救急時には温泉病院と即座に連携が取れることが特長である。設立にあたって保健所が尽力した経緯があり、医療福祉の調整機能の一例として紹介していただいた。この日も施設側と保健所職員の間で意見交換が行われていた。

午後は温泉病院を訪れ、院内を案内していただいた。温泉病院は平成30年に開院したということもあり、院内は広々としておりバリアフリー設計が整っていた。特にリハビリ施設は充実しており、多くの方が利用していた。次に、地域医療枠の卒業生である石亀先生が地域医療について話してくださった。地域医療を行うにあたり、患者の暮らしを知り、人となりを知り、長きにわたって密着していくことが必要であると教わった。新宮・東牟婁圏域の患者は一人暮らしの高齢者の割合が高く、多職種で連携しながら慢性疾患に対処したり、日常の健康を守っていくことが重要だと考えた。

次に那智勝浦町市野々にある土砂災害啓発センターに移動した。この施設は平成23年9月の台風12号による紀伊半島大水害を契機に設置され、甚大な災害を繰り返さないよう、記録パネルや映像を使った啓発活動を行い、また土砂災害研究の拠点ともなっている。紀伊半島大水害を身をもって体験した私としては、改めて災害の恐ろしさを知り、後世に伝えていく重要性を痛感した。また、災害時には保健所が地域における危機管理の拠点となることを学んだ。

3. 考察

昨年に引き続き、研修を通じて、保健所が地域保健において果たす役割の大きさを再認識した。例えば「かのん」は温泉病院の敷地内にあることから、施設利用者の緊急時の迅速な対応

を可能にしており、保健所を含めた行政と現場レベルの一体となった努力の産物であると感じた。また、施設職員と保健所職員の意見交換では、「障害児の親に対してどこまで育児の助言ができるのか」という質問に対して「施設と保護者の間に保健師が関与できればよいのではないか」と回答し、そこに保健所が力添えするとのことで、まさに保健所と地域の施設の連携を見てとることができた。温泉病院では、石亀先生のお話の中で、地域に根ざした医療を行うにはその土地や人柄を知ることから始まるといった内容があったが、それに加え、科学的知見から地域特有の疾病や罹患状況を知ることにも欠かせないとのことで、保健所が疫学データを収集、共有しているという点で、重要な役割を果たしていると思った。さらに保健所は未然に災害を防ぐ活動に貢献し、災害発生時には危機管理の拠点となることを学び、幅広く多方面から地域を守っているのが保健所であると実感した。

4. 謝辞

今回の研修では形部所長をはじめ、関係施設の方々には大変お世話になり、厚く御礼申し上げます。保健所業務を知ること、病院とはまた違った観点から地域医療、保健福祉を捉えることができ、見識が広がりました。ありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療科1年生 田中 日向子

1. 研修施設とその地域の概要

新宮保健所が管轄する保健医療圏は、新宮市、那智勝浦町、太地町、古座川町、北山村、串本町が含まれており、圏域の面積は992.45km²で、人口は約6万7千人である。高齢化率は39.1%で和歌山県全体の高齢化率よりも高い。圏域の病院には、新宮市立医療センターや、那智勝浦町立温泉病院、くしもと町立病院、串本有田病院、潮岬病院、日比記念病院、新宮病院がある。和歌山県の地域医療構想に従い、今後は急性期、慢性期の病床が削減され、回復期の病床が増加する予定だ。

新宮保健所には新宮本所と串本支所があり、今回は新宮本所を見学した。新宮保健所は、平成29年より、町村の健康増進計画策定を支援している。計画策定では、研修会の開催、健康課題の整理、アンケート作成の指導など行っている。この過程で整理した結果、人口減少・少子高齢化が県内でも顕著であること、圏域全体の平均寿命は男女ともに全国、和歌山県の平均寿命よりも短い傾向があること、死因構成割合、要介護認定率、検診受診率、生活習慣の状況などが分かった。保健所が進めている健康を守る仕組み作りは、病床再編と機能分化・連携を

図る地域医療構想や、在宅医療・介護のネットワーク作りなどがある。平時の保健所業務だけでなく、災害時の保健医療ニーズの資料を作成したり、大規模地震時医療活動訓練を行ったりしている。

2. 研修内容 日時 7月31日(火) 9:00～17:00

9:00～10:30 施設の説明、オリエンテーション

オリエンテーションでは、保健所や保健所における医師の役割について学んだ。公衆衛生医師の仕事は、地域住民の健康を守ること、地域を診断すること、健康を守るシステムを作ること、健康を守る決断をすることだとおっしゃっていた。

11:00～12:15 重症心身障害児者通所施設「かのん」の見学

かのんは、那智勝浦町立温泉病院の前にあり、病院と協定を結んでいる。保健所は、施設に通う子の親にアプローチして重症心身障害児者をケアするとおっしゃっていた。

13:30～14:45 那智勝浦町立温泉病院訪問

温泉病院で働いている内科医の先生にお話を伺った。週に1回研修日があり、その日に医大やほかの病院で研修し、医大のネット配信の授業で学んでいるとおっしゃっていた。保健所とは、主に感染症の届け出のときに連絡を取るとのことだった。

15:00～16:30 土砂災害啓発センターで研修

このセンターは平成23年の台風で大規模な被害を受けた紀伊半島における土砂災害に関わる建設技術の研究を行っている。土砂災害の講義を聞き、模型を使った実験を見ることができた。

3. 考察

これまで保健所に行った記憶さえなかったもので、保健所の役割や仕事など初めて知ったことが多かった。保健所の医師の仕事は臨床医の仕事と全く違ったので、医師になってからもたくさんの選択肢があるのだなと思った。また、新宮保健所は様々な機関と連携していることも今回の研修で分かった。私は保健所といえば、乳幼児健診や予防接種だと思っていたので、障害者施設での支援や災害時を想定した訓練を行っていることに驚いた。また、今回訪問した那智勝浦町立温泉病院では、地域医療枠の卒業生の方にとっても有意義なお話を伺えた。私は僻地でどういふうに医療を学ぶのだろうかと不安に思っていたので、具体的な方法を聞いて良かった。

4. 謝辞

最後に、今回の保健所研修のためにお忙しい中貴重な時間を割いて準備して下さった新宮保健所の皆様、また、訪問させて頂いた重症心身障害児者通所施設「かのん」、那智勝浦町立温泉病院、土砂災害啓発センターの皆様、この研修を計画して下さった地域医療支援センターの先生方にお礼申し上げます。短い時間でしたが、非常に今後のためになる経験をさせていただきました。ありがとうございます。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 1 年生 三並 桃佳

1. 研修施設とその地域の概要

新宮保健所には総務健康安全課、健康福祉課、衛生環境課の 3 つの課がある。総務健康安全課には、主に生活保護や社会福祉関係の事業を行う総務・保護グループと医療機関の許可・届出、感染症予防など医療関係の業務を行う健康安全グループの 2 つのグループがある。保健福祉課には老人福祉保健や介護保険、障害者福祉を扱う高齢・障害保健福祉グループと健康づくり推進や母子保健、児童福祉などを扱う健康・子ども家庭グループの 2 つのグループがある。衛生環境課には食品衛生や動物愛護、骨髄バンクなどの業務を行う衛生環境グループがある。それぞれの課がそれぞれの業務を果たすことで新宮保健所が成り立っており、地域の住民の暮らしを支えていると実感した。

新宮市の面積は 255.23km²、総人口 28,968 人（平成 30 年 9 月 1 日現在）であり、奈良県・三重県と隣接している。また新宮市は世界遺産のまちとして知られており熊野三山の一つ、熊野速玉神社などで有名な観光都市であるとともに海・山・川に囲まれた自然豊かなまちでもある。新宮市が属する新宮二次保健医療圏は新宮市、那智勝浦町、太地町、古座川町、北山村、串本町で構成されている。この医療圏全体での人口増減率は-7.79%（2010～2015 年）で高齢化率は 39.40%（65 歳以上・2015 年）である。これは和歌山県の人口増減率-3.85%、高齢化率 30.90% と比較すると人口減少率、高齢化率が高いことが分かる。

2. 研修内容

- 9:00～10:30 朝礼・オリエンテーション
(保健所、保健所における医師の役割についての説明)
- 10:30～11:00 移動
- 11:00～12:15 重症心身障害児者通所施設「かのん」見学
- 12:15～13:30 昼食

13:30～14:45	那智勝浦町立温泉病院訪問
14:45～15:00	移動
15:00～16:30	土砂災害啓発センター 研修
16:30～17:00	移動
17:00	新宮保健所にて総括・解散

3. 考察

私は地元の保健所にも行ったことがなく、保健所の役割についてほとんど知らなかったが、今回、地域の人々を様々な点から支えているということがよくわかった。移動中の車内で保健所のスタッフの方が、「保健所は多くの問題に対処しなければならないがどれもやり方が決まっていない。でもそこが楽しいところだ。」とおっしゃっていた。例えば、重症心身障害児者通所施設「かのん」を訪れた際に管理者の方から「障害を持つ子の親にどのようにアドバイスしてあげたら良いのか」という質問があり、それに対して過去の講習会を振り返るなど、親身に相談に乗っていたのが印象的だった。このように保健所の役割は多岐にわたっていることが分かった。

4. 謝辞

今回の研修では形部裕昭保健所長をはじめ、新宮保健所の皆様、那智勝浦町立温泉病院の皆様、土砂災害啓発センターの皆様から本当に多くのことを学ぶことができました。お忙しい中、私たちの研修に協力してくださりありがとうございました。心より感謝申し上げます。



ホームページ・ <http://www.cmsc.jp/>



Facebook・ <https://www.facebook.com/W.CMSC>

和歌山県立医科大学地域医療支援センター



和歌山県立医科大学 地域医療支援センター

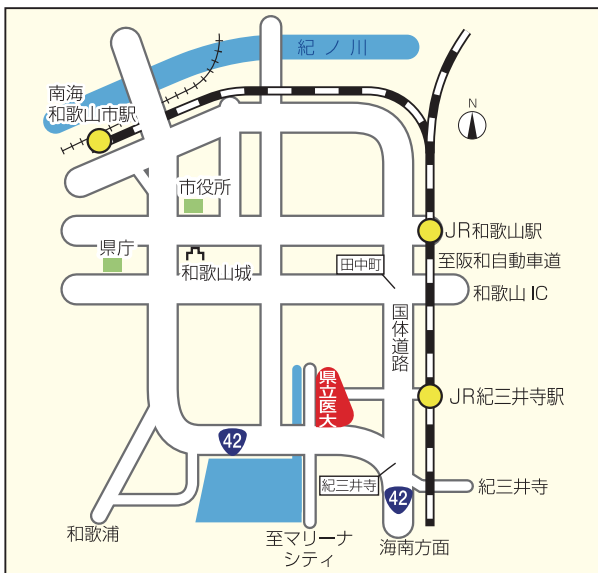
〒641-8509

和歌山市紀三井寺811番地 1

TEL : 073-441-0845

FAX : 073-441-0846

アクセス方法



- JR 紀三井寺駅 → 徒歩 (約 10 分)
- JR 和歌山駅 → バス・タクシー
- 南海和歌山市駅 → バス・タクシー

- JR 和歌山駅前
 - 1 番のりば「医大病院」行 約 25 分
 - 2 番のりば「医大病院」行 約 30 分

- 南海和歌山市駅前
 - 1 番のりば「医大病院」行 約 30 分
 - 8 番のりば「医大病院」行 約 30 分
 - 9 番のりば「医大病院」行 約 30 分

平成31年1月発行

発行 和歌山県立医科大学 地域医療支援センター センター長・教授
和歌山県地域医療支援センター センター長

上野 雅巳